

手
紙
の
巻
末
に
書
き
加
へ
た
書
名
は
『
海
防
要
略
』
と
す
。

坤

中村俊定文庫
文庫 18
400
2





篋纏輪 再註 絲切齒下

九月



一重陽宴 九日

○愚按公の所行事は...の教天照神のは祭月又河内一の宮
平岡系のは神事...民俗五并後...
系矣...の五兄弟... 芳室

増 醍醐祭 九日 年中行事...
...の神と...
...の山の名...
...あり

非皆系...
...

古くもふえ方のあり

るふれもあつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても
あつてたふれの方

るふれもあつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても

いふそのふれもあつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても
未訪のあり

大成累巻

一住吉寶ノ市 十三日ノ夜 外市ニ此市ニテ買求タル年ヲ以日用ヲ

達スル者ハ富家ト成ト云傳フ故ニ寶ノ市ト名ツクト云々

○愚按寶ノ市十三日也といふ人足意なきの 律買求て分別あり
月々あつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても
非あつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても

正儀くつてもあつてもしよきなのゆゑにたつたふれもあつても

いは神事ノ相撲會と云々 は古ハ格闘の宮此市
ありし今ハ格闘の

住吉祝部大宅姓曰九月十三日相撲會と云々 神真玉出侍岸トモ

願宮ハ渡所 御殿屋敷又傳々供あり 俗ハ住持供あり 而后

津守神主勅使侍て宣命と後上は相撲十三番童相撲三番あり

角力者積鼻禪の上ハ注連と云々 注連ハ注連の神也

未の刻ハ終神真還所と云々 寶ノ市ハ住吉市ハ當社ハ市と

ちり住吉と云々 由ハ天孫履く梓弓の所子火明命十三世也 田槎の宿禰号

神功皇后三韓所征罰一倍後ハ皇后本土に御せりて後神祕アリ

田槎の宿禰初て神主と云々 是より七姓の氏人分は 大願津子板屋

拍大宅 神奴と云々 本代ハ氏人神孫也 田槎の宿禰の室市嬢の命

と号是市と云々の神と云々の神霊と云々の祭と云々の社と云々

地と云々の又住吉の神と云々の神祕の所社と云々のを祀の住吉ハ市嬢の

命上給り又玉子居の干湯有珠の秘授ありていりて市と山宮の
市是しと世俗非と求るは珠の経法よりしては身こゝろの秘授ありて
淡林派西山宗因のうふ

住よしの市を又居くさうへく

是たうの市はうへくは居りて秘授せしと人

一天王寺一乘會今八十五日「やまのいにてちかきせイ二十四日 大念佛會也

○愚抄存儀と一乘會十四日ありこれ昔のまじりて一乘會十四日 大念佛會
十五日ありともある入るに年々ありとも或一乘會の二月涅槃會と
いりりとも今世十四日ありて十五日大念佛會行る處ありとも
二月十五日の舍利會も唐の二月九月の大念會二日つて續きとも

増ラツニナ太祭ラツニナ斗祭ラツニナ十一日 摩訶羅マカラ祭りとも云は法の儀を承るは達之を深
まじりとも八月太子會とも見ゆへともあり

山城國葛野郡太祭ラツニナ廣隆寺桂宮院内ハクワリヤ伽藍神大辟の神社互に
祭神奉始を帝といは板イタ板イタの思オモて神カミのともは神人唐冠イタと敷イタ
あやうき板イタの思オモてふけ牛ウシとまふ二匹ニヒツと地チりり門カドくは後ふ
と人唐冠イタを本に板イタの思オモては冠イタ小花コハナともう洋ヨウ人ヒトと對て行列に
牛ウシともあり神人祭文を續上り

祭文二日謹上再拜謹啓唯南膳部洲大日本國年次天文十八
年無射十二天朝日豊トヨ上登り夕日豊トヨ上降る田の中は浪花菜
金実結天因て地戸和合ともる今也

當寺の半信四番の大石等誠は花の衆よりも言く又葉の
唐カラよりも信シりて恒例空閑の節フシともりてまじりて神と祭りともあり
まじりての延福の針ハリを鬼と敷イの除災の美ミを上の林ハヤシを天帝アメノミコ祭

四天王日月五星九宿七曜九曜三辰九會下大魔玉界
 又道大神卷山府君てらるる令司流あての山石流者二十八所
 五所護法尊朱天神紅敷養屬総て日本國中の大小神祇田の
 中よあつねも輪積片山よあつねも後の本相の本本々々さ
 後の本相家の真うらうらうて子連くやうて観く
 けくの道祖神家の大志と神也皆あやうとて言言て曰
 又此世と乾坤の氣と陰陽と陰陽のうふなり信と教と
 天と地界をん行とあり是地得夫の科を女是倫不神明の度也
 有利

△因茲卑傲の幣帛と神教て應正神祇り
 よよと以貴神思慕くころくらんや
 因茲口蓋の大覆ふんよと無切と神て十抄の儀式とま万人の世
 無と信及てて自神ののほま一極て信家の感嘆と成とて信
 神れ細定とまらんとん

△然るさつら新し本道といふことん

よまよまの事さうけけりうら半に能とて大固とまのむいて聖
 有まらやせとふ冷と月ゆるもあり又是は後常とてまら神
 と教家とまらうの倫と人下あ徳とる家茶ののちん

△因茲ま
 さくけ退くことん

△先二酒の信所の中よ忠ひて物せうせと
 望人の奇怪とふことん

△小童とも本をけりのらんとてのり
 後子子取をねるとは師にも老くさる扱あは後後病風といふこと
 所養藤式の藤養圃風性了尻養膿瘡あつて瘡まといふこと
 わくると毒い瘡

△瘰癧瘰癧より母より此地くつらわり信ん病
 志のうらうて種楊法毒堂のかり本具法乃う瘰癧言仲人闘争
 合年同言

△貪言男の入人勢を女成女の障あつて又の瘰癧の
 瘰癧皮合後大鳥小鳥をを敷やうう大嵐田の障を牙の瘰癧
 やけ天敷天敷を道まう人のやけいふあてはせくをく根の因を
 の因まてとらひてん

天又十八年九月十二日 祭文上宮太子神位

摩訶羅神ハ素盞鳴言 道祖神ハ後田彦命

右天又十八年と祭文之宮也 本ノ宮之カチ身と世に訓也 予ハ素
素信の群集大矣と云は是と社祭と云は神國の遺風也 予ハ素
素素りと云は古風の社祭終る多一命も上宮を素素川播一命
して神業創り十年と云りても半を承り終るはいと云は終る也
伽藍年紀亦云く大成ノ如ク素長の治天より終る社祭の社祭
も亦くは發起せりも東照神君の神徳終る旨と云へ

一城南神ノ祭 元日 城南寺ノ社之上鳥羽ノ里ニアリ鳥羽ノ上皇ヲ祭ル神ノ
此所平安城ノ南西ニアタル西南ノ離宮ト申ス下畧

○愚按城南神ハ山城紀伊郡中嶋ニ祭ル上皇ヲ中嶋竹田の氏神也

延喜式ニ眞幡すの神社とあり日本紀略別雷の創り云り云々
の上皇と祭ると有てハ意遠く依て注ん

け地人皇七十四代高祖の上皇ハ聖宮として上皇は在母とい神とこと云は
崇教原ノ修勢石尾水鴨春日社尾平社始末と合せ祭て

不易代ハ大神宮と勸修寺ノ安永寺院の伽藍神ノ安永寺院ハ上皇
は皇創之は言類と云その下小尊と云は皇陵ノ安永寺院ハ皇

新養の一本寺ありて今に別院云一城南寺とも一城南社の社と相
去事五町斗祭りの日神樂ニ基あり一基ハ高祖の上皇と云は此神樂ハ

安永寺院よりあり一城南社ハ方りとも是太神宮と上皇所
拜の遺式とも祭りと云は一福は云く行の云は上皇の神樂ハ

安永寺院の宮庭と細く城南社ハ社人云く二基を云ハ上皇所神樂の
棟ともあり一城南社又日光のあり上皇といは云く神樂とも云の
た城南社ハ高祖と云は云く今世宮殿の帳と白布

よみて不易大々太神宮と云紀一あり 已上大成

氏の子も林の鳥も同く下り初の事云々云々より

一 銀杏

例ノ字論上畧

古語ニ曰盡信書不如無書トハ如是ノ事ヲ云フ歟

又曰凡書誤ト云偏自己見聞則是人已異ナルヲ非トスルト奇ニ
聞見ヲ信シ事物輕率ニ決定スルト此四ニ必誤リアリト云々然レハ
輕率陋愚ノ此書踈謬多カラシコトヲ恐ル觀之人詳ニ察シテ
其謬ヲ正サハ是ヲカ幸ナラン

○愚拙がさるる道の幸十梅いさるるさる先哲の書記と仰て仙り
辞儀謙退の稀くて自賛のくさるるやさしき道徳の芭蕉の花咲
拾穂の音をきく文武園のくさるるさる古今の事カより蕉
門の道をひたすもさるるさるさる其人を信ずる蓮二の有才十折の

ふふさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
蕉門一瓜をさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
の前後と後記するもの其門を破る事ありおはま賛吟ももの教ふる
あさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
はさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
おまの樹下は小まさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

コカラシエフナ

一 小瀑江鮒 是論物へ或書ニ江鮒ハ泥ヲ喰フ故ニ泥嗅キ可アリ此コロニテ其

味能成色モ白シ瀑シタルカ如シ依テ名ツクト云リ此説不得心シ苧環ニ
紅葉鮒ノ下ニ出シテ境ノ浦ニアリト記セルハ如何江鮒境ノ浦ニ限ル
モノニ非ス又江鮒ハ鮒ノ一名ナレハ是鮒ノ事ト云ハルモ有リ鮒ハ無季
ナリ彼是不合ノ説ニ按スルニ是小瀑江ト云江ノ紅葉鮒ニテ昔京師ニ
多ク出シタルモノト見ヘタリ小瀑江本朝名所志ニ見ヘス豈ニ泉州境辺ニ

有へシ私ニ名ツケタル則ナトハ後知レ又取モ有モノ又古記泉州ノ海鮓
古來ノ名産ニキヌト称シテ形鮓ノ如シト云々上古和泉国ノ本名芽湾
ト称ス依テ撰泉堺辺ノ海ヲキヌノ海ト哥ニモヨメリ則チヌト魚ヲ出ス
海鮓ノ二字チヌト訓セリ是ホノコトヲ云カトモ

○愚拙草履小葉鮓 コサレ 小澤江鮓 浦ノ浦 と云々ニ云々混雜セヨク
少りぬ先紅葉鮓ハ鮓ニキヌ核葉ノ條ナリ云々ト云々云々
して子りぬ云々の云々 毛吹草 といひぬ云々云々云々云々云々
あり又小澤ハ云々云々の云々

通俗志ニキヌ云々云々小きりし川走り江鮓と云々云々云々
流抄大成ニ鮓ナシボラ 和名口女又鮓又江鮓小きりし川走り 俣留記
メウギキチ 名古皆因由之但ナシボラメウギキチ 俣留記ハ此鮓云々云々云々
いすの云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

江鮓といふ海に育す云々云々海海の漢字を以て云々云々
八月および地味の浦云々云々云々云々云々云々云々云々
只俗名ありて云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
下草ハ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
小ざりしハ草脚云々の俗名なりて云々云々云々云々云々
どけハ俗名ありて云々云々云々云々云々云々云々云々云々
小ざりし云々云々の名ハ小付ありて云々云々云々云々云々
畑の名ハ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
にて云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
蟹花の枝氏林といふ云々云々云々云々云々云々云々云々云々
らぬ網と号網といひて云々云々云々云々云々云々云々云々
祀士生つと云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

一住吉ノ神送り昔俗十月諸神出雲へ臨行ナル中ニ住吉ノ神其鑑預リ
ナルニ依テ諸神ニ先達テ九月廿日ニ臨行シ玉フト云俳諧ハ平話俗談ノ
當用ナレ如是ノコト季ニ用ル勿論ニ

○愚按予が大成の書よける有りて記あり住吉祝部大宅氏の曰くハ
小祭りトシテ神送りトシテ神楽玉出雲御飯屋殿へ後御飯屋の後有
足當社秘極の又御飯屋の南に後御飯屋に出雲石トシテ之を交ハテ
大祓宜役詞トシテ出雲送拜の有り申 祓禊先當社の小系社送リ
世俗小ハ是ノ秘極トシテ直に居の送ふよりハ秘極トシテ可成
又祓禊社トシテ後御飯屋別是神の送ハ後御飯屋トシテ宜ニ秘極ト
ゆるトシテ祓禊の有り十月ニあはる

十月

一神送り諸神出雲工臨行仕玉フ故ニ送之依テ十月ハ神無月ト
ト云事書トニ載タリ或ハ出雲国ニ神在ノ浦アリ是後人ノ
附會シテ名ヅケタルモノトソ徒然社ニ十月ヲ神無月ト稱
シテ神事ハカルト云事 慥ニ記シタル本文ナシ本説モナキ
事ト云ク

○愚按諸神出雲へ臨行仕玉フハ法書ナリト云事秘
極ノ秘極トシテ神送りトシテ神無月ト云事ハ
神送りホト云クハ是ノ秘極ノ秘極トシテ

兼好ハ吉田ノ庶流ノ神道ニ沙汰アル事兼好不知事有ヘキ
ヤ無キ事ナレハコソ徒然社ニ書出ニタレ

三辰

或書曰十月八極陰月之陰則鬼之陽則神之依テ陽無月ト云ク

○愚按或書トハ後漢貞淫抄トイハル者ト二通りあり貞淫の曰鬼ハ

陰神ハ陽ト十月ハ極陰の月ト云ハ人ハ陽トハ八卦ト云レハ西北の

角ト乾皆連ト号シテ九月十月の卦ト云その間ト西北ハ乾ト云レハ

十極の表ト云レテ神ト号ス後二理ハ善好ト云レテ神ト云レハ

のトハ善ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ

人ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ

ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ神ト云レテ

四辰

或記曰十八極數ニシテ上無故ニ上無月ナリト云リ十二律ノ名目ヲ

考ニ十ノ調子ヲ上無ト稱セリカニ三月ノ秋惟ニ此數ヨリ出タリ

○愚按或記ハ大全の語ト云旨は下の曰九サレハ數ト云ト云云

九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ九ト云レテ

如きに杖と穿て持ちあり 予う門神七月月也一社國不社本
 去るた如雲斗をけ社本あり身近の社又を秘蔵の極行社地の
 中にも昭まはる大社のあり出立の一國今ふ社本あり
 らるべきに社本あり社本あり社本の為と社本あり社本あり
 社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり
 の後を社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり又
 言師慎清 霊社の日神無月のより如雲不社本あり社本あり
 社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり
 又如雲斗の奇つてまはるの上とて聲嫁の社本あり社本あり
 の社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり社本あり
 東雲是社のめく社本あり

今月諸社神事無敷故二後二神無ノ文字ニ書カハタルモノトゾ此月
 諸社神事ナキモアラズ住吉ノ神供 上子日 河内平岡ノ神祭 上申日 松尾
 神前八講 上日 讚州金毘羅祭 同日也ツヒテモナモ神ハ不變不測ノ
 神跡也如何ソ往來ノ變アラントモク

○愚拙又十月法社の神事されどもあはれ社の社事とあり
 先住吉の神供 上子日 とあり是はつぎ住吉も是も取らぬ
 たり住吉の別社大海神ノ十月子の日の神供あり社ハ子をと
 祭日とて後吉ハ祭日とて祭日とて後吉ハ祭日とて祭日とて
 これ子卯の社といふ社秘ありついで河内平岡 上申日 社本あり
 十月ふりて社本あり 一日記に上月上申日私記春日といふ社本
 あり 一ふりて社本あり 十月上申日 一中にも平岡の平ノ社本あり
 よくわたりけ二つこの社本あり社本あり社本あり社本あり
 法花經八品講讀して社本あり社本あり社本あり社本あり

神めて唯一字源の神奈とすふは是れ我非と申して十月後社
に神の事と有るは是れ也と申す世と惑ひ人の根心同
何と云ふんじ意と云凡流の徒と云ふれは是れ也と申す世と惑ひ人の根心同
ふ測るまへに性沙汰と云及夫子も怪力乱神と云語より是別
怪力乱の事此の理の事と云ふものある君も云信申は鬼と神の造化の
途不云は性沙汰もけりて理と察しむもの事と云ふは聖賢の事と云ふ
事と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふ
千梅と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふ
る此理を云ふは神の性も心家の事と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふ
事と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふは是れ也と云ふ
神事月の事と云ふ

あるま居る程おく一玉津山
家くのるま居る程おく一玉津山

芭蕉
其角

一真福寺法華會 六日同維多會 十日ヨリ十六日ニ至ル

○愚按西大會の注と事根源の畧語をれは事に後で畧は
今世ふ大會も一寺院御門主二世一度行せし

一御影講 十三日 日蓮上人ノ御忌也ヲメコト云俗言ノ々、俳諧ニ可用

ヲメコトハヲミエイ講ノ重言也然ルヲ今御命講ノ字ヲ用ヒテ世ニ
通スルシ 千律師附合ノ句ニ

黙礼ヲシテ別レタル侍ヒ衆
暮シ又サキカラ御命講押シ合

○愚按御命講の字と用ゆるは今の事にはありは合の字は
引まてはしに及の許六が風俗文選り

御命講や他のやうな酒み
芭蕉

一水官解厄 是中華ニテ十月十日ヲ下ノ元日トシテ道士ノ沙汰スル
事ニ凡テ如是ノコトニ無本據

○愚按通俗志云上元 正月十日 中元 七月十日 下元 十月十日 といふ

書言故 曰上元 正月十日 大官福也 賜中元 七月十日 地官罪也
赦以下元 十月十日 水官厄也 解厄 又曰水官主逐百司人間の
禍福 善惡と關して天國と名して厄と解厄と云々

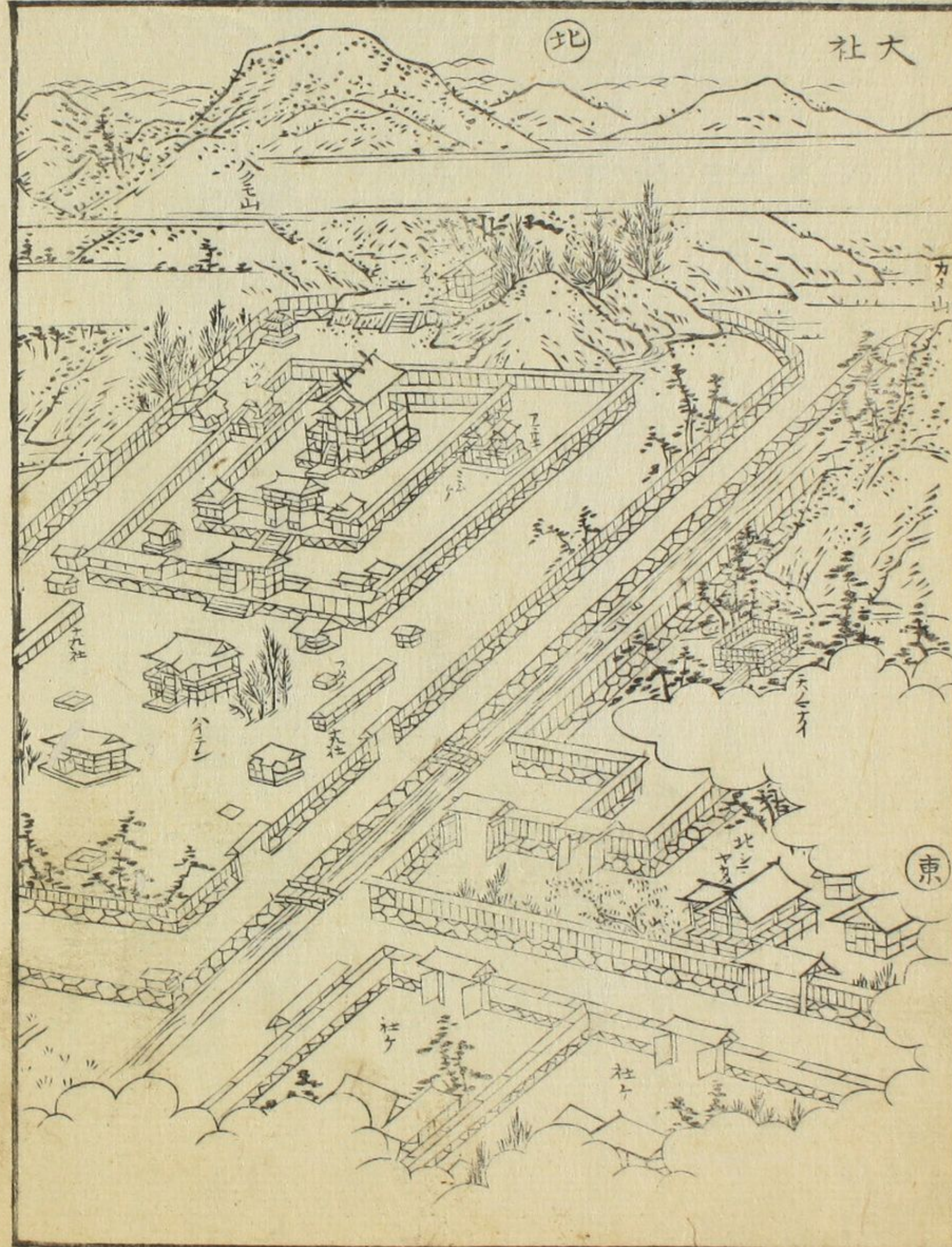
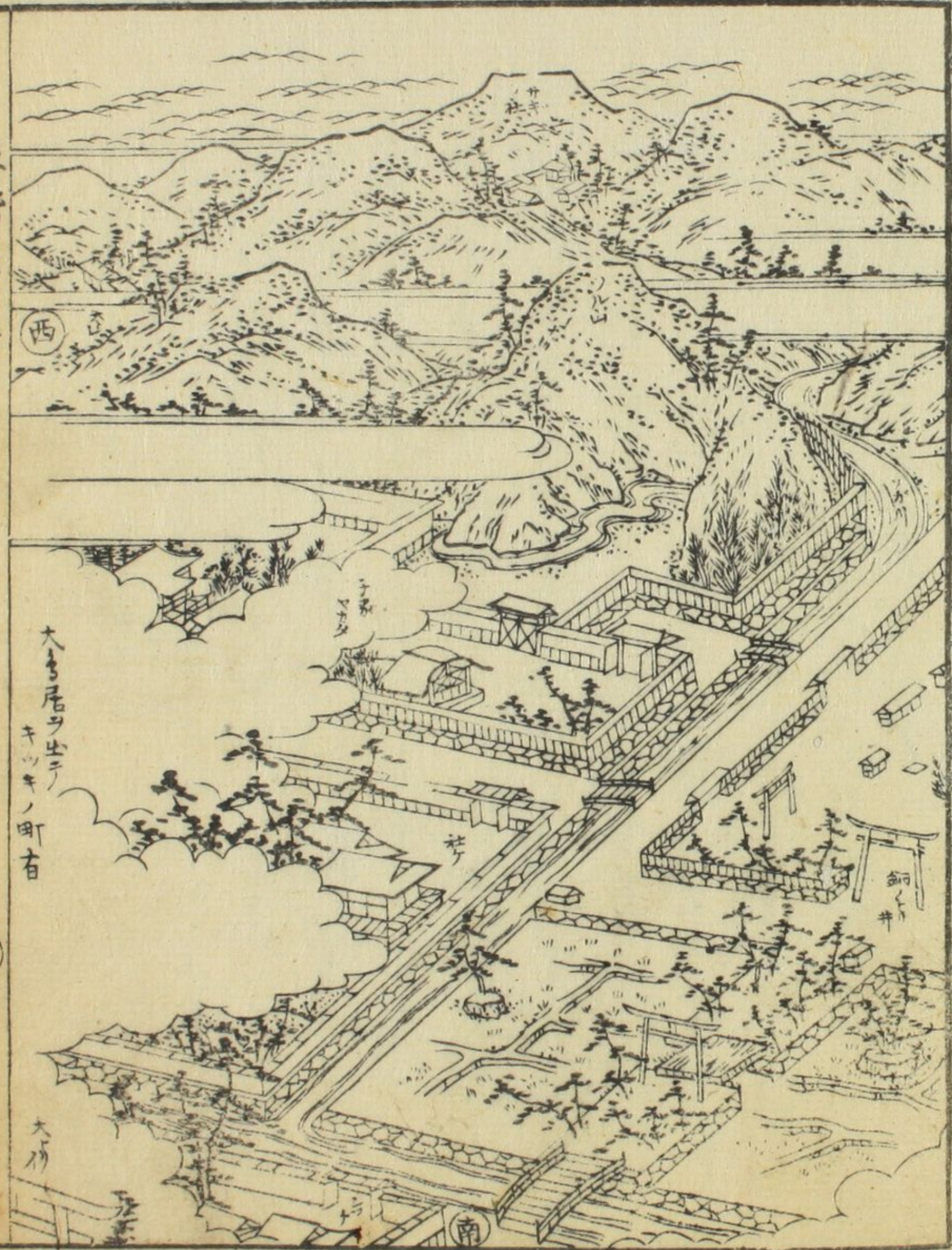
一法勝寺大衆會 此寺類顯ス其旧跡々々今粟田辺ニアリト云々

○愚按法勝寺ハ六勝寺のひととて大衆會のひとりといふ天台三會の一也
白河院御草創供養の行事あり九重の塔も有るふたつの塔とて
以廢して今ハ墨崎邑上流のふたまり今も農氏池井と稱す

金紋の尾及び柄の松皮未出

一氷魚ノ便 宇治及ヒ田上ノ網代ヨリ氷魚ヲ召ス便ク延喜式ニ載ス板
此氷魚ト云モノ江湖ノ名産ニシテ他州ニテハ伊勢江戸ノ江ニ有白魚
ヨリ勝テ潔白ナルモノ江州田上及ヒ網代ヲ打テ取之堅田ニテハ攪網
ヲ以テ多ク取レリ然ルニ或書ニ曰古エ宇治川田上ニテ取リシ氷魚今ハ
勢州三州駿遠ノ海最多ク取之竹串貫眼曝乾鮓ト名ツケテ
諸州ニ送ルト云々是大きニ誤ノ記シ其鮓トスルモノ氷魚ニアラス白魚ノ
類ニテ別モノ又大和本州ニ宇治田上堅田ニテ冬月取ル氷魚ト云ハ
鮓ノ苗ト記セリ是又大きニ誤レリ皆書籍ノ上ノ沙汰ニテ推量之
其生物出處ヲ見届サルノ誤書也如是湖水ノ産魚ハ江湖ノ者ヨク
知之氷魚ハ鮓魚ニアラス白魚ニアラス勿論鮓ノ苗トハ大きニ格別ニシテ
冬月有テ春季決シテナキモノ也色サナガラ氷ノコトニ白魚ノ純白ナルト

北白糸川



言言

十八

故き日池地化皮原にきて海上に浮上地下人は是とん出づ國造
 新小別羅羅の池地曲曲入て神庭に細じ毎例に事も是とぬ見
 せし是地とすも恐れあつりて神祭の事左家と門戸を
 因て知事事す一折國造より素子のほり大植り今の神孫
 四十八世孝時の子あり伊嫡法孝の嗣子あり二男孝宗十家の祀
 三男貞孝北條の祀故有て是より五國造と成年中行司系統も
 月多りふ勤行は神代より神火神水と嗣大地と流るる日の
 時も國造に所信と歎く偏神を以て素教は是國家の戸也
 素子の八の父罪有て父の神此命と皆く根の國ふ海より孝
 日の神ふ設別と取り清んある敬し孝教二徳の神神に孝安二年
 二年小大に貴のそと梓葉大の神と崇り大に貴七ツの所存を
 山王七社も山神之三輪石上布るね尾もけ神々々々々々々々々
 経受しよ本朝大馬の神熟之當社の神室教くの中にも田田田田

農具あり稼穡の艱難と能示しよ神意祝言首とて一奉細の
 和方と澄あり神事多のつる和奇の氷を漸中細を氏女にまはら
 六月廿一日されん

又 神文おけま居るとあり今ある神事月日非
 古昔法下

又 神の神事よりその地とともなるや、いふるらん
 神の事々によりて

神の花や神の井垣のいふらん 全
 八重あもろく九重ろくは又く非 宗類

古唄子和奇の友つ身本八重の神流と句の上ふきて二年一そ
 法系のお奇ありを改一そをまじ証は 古唄子

和らるる處の身ともくわりのひれ川よふまやとてらん
 當社八月の神事より廣濃の小池和風流流秀ね及びいつれ教多ふ

誘われて美佐良に神宮八坂より十石を以て法皇より美佐良に
 神宮より芝居市店を移群するに大社を殿構の内へ入りて
 ゆるに園遊華下へ殿下屋所を後の守護人教員に方の行旅
 路中の官舎を志度守に本殿へ入るに後美佐良の人社より時宗と
 わる各差別あり 予も血強と名し馬帽子を穿てておのり
 舞殿の宮殿より度守と下せしき御立馬帽子は白妙の神に合て
 ありし押合時ぬきとありし内殿天井に秋雲を画し八雲と
 ありしを筆写しし七ツありつづくありし文人深秘なるしと
 答ふ神祕の真儀をいかに有るべきふちあはれて

雲七ツ其奥深し一麻の年

け地ふし後氏季親冠季のまほまあり地のくおあひて白くあり
 八重垣り記ふ後りて四谷に侍日沈るまを神宮にありてお
 ちる大社よりあるつとて松枝あり室のねと号く神門大海を

湖水のうれぬくもカカぬ山止二里念廣カ三里岩石さうみなく
 ねを積よて松枝うく風あき時へ白沙飛流きて枝と掃ふ
 音のくく俗みんで音のき演とらしけりりい山をれ赤人乃
 塚ありしと山人塚塚とら山人丸の

石りうさまつたのまはらり浮世の身とんそてめら
 と海をまきいれ地よつりけり和奇の秘事とせる聖を塚
 八重よりしとまふおぼあらしとて一梓葉より十り余り深五
 ちく地のく秘まよまこり御水とあがりて松江錦城下へ入
 門葉の音中に別て平の松江雪路を幸しお杖とてしるる美と
 初め教書の好字より夜流流よりよふ南朝お波子をよ射し
 の一真布郎の重貴とて美の集りよよ教書を送り地城の
 ろくま成八重垣り記ふち月たりぬ

題四季

玉樹鉞

雪定卿

花の時枝折るをくくをばもは火

曇影や横うつらぬ花の影

小おちけくおねははのあふく

灯を消して一ふつとさめてゆくか

その君御をよと降き下りまのり八重垣見たふあふくゆわね國
 の風俗をよと降き下りまのり八重垣見たふあふくゆわね國
 かくせん又神門の湖へ社を造りてまのり八重垣見たふあふくゆわね國
 社の執行畧々九澤を二百余りまのり八重垣見たふあふくゆわね國
 と神法好まの自く百負をくく又及しつるふ磐石を成極
 八重垣見たふあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極
 ありて投きりまのり八重垣見たふあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極
 本意然くして十年天命のまのり八重垣見たふあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極
 諸ふあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極
 候ふせおしつるふ磐石を成極
 門生の推れれおしつるふ磐石を成極
 何の何のまのり八重垣見たふあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極
 板行してせよ弘く人や皆名利と求らんあふくゆわね國一快板行とくく及びつるふ磐石を成極

沖へ到他門を親疎とて... 惟本二祖芳後八旬の著著の花... 天姥とわつ大集之祖師の支例も...

神在月とあつて... 國の香花又も... 廣津澤るよ...

一 枯野ニ露 御筆ニ秋ニ十月ニ出せ... 枯野ニ露露露色ナト結ヒタル...

御至守武能借ヨシノと名を御冬千句と述ぬ人王百六代後奈良院の
所守天文九年庚子歲編作ニナサレ是非諸書の權輿ケンウ今室曆十二年近
其千句の法ハ應安新式コトノミヤノイニキ今室曆十二年近
ては終るもの之是能借の元祖今辨別守武靈社イヘニシに
貞徳ハ中真ナカマコの祖師又山崎元能借の式と傳りといふ大抵
山崎宗熾俗名志那弥シナヤ之命範重ノリヒ一夜庵と号大抵全百五代
後柏原院所守永正十一年甲戌編集コトノミヤノイニキ板行ハ守武より
早サキといふこと述る所守武サカキと先サキといふ大抵全百五代
より一も後の終てなり只連奇の記ありてあるとありて一向つはけて
真マコとせよといふ九條松山君言台ノリノ下新嘉保ニナサレと名を連奇
の伝ありといふ慶長のは隆ノリノ下末末記も今室成松山ノリノ君より
去者紹巴ノリノは能借の上より小野の貞徳ハ連能兩道の宗匠は先行
有アリといふ貞徳社の家小長ノリノといふ所貞徳社や美能のノリノに傳

さて去者法守紹巴ノリノも子家ノリノにて能借の式目を作るなり是ノリノと云ふ
と去世人是ノリノと云ふ筆と名をたつたに能借次ノリノの書成ノリノ天水抄
五葉抄 道遠明鏡集是之ノリノ今室成松山ノリノ君より
たの更長ノリノの法は各目ノリノ又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
りて終る所は能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
の書ありて能借三抄の天水抄ありは又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
の天水抄あり一板も貞徳連能及の宗匠は能借の法ありの貞徳
竟高工京妙蓮寺より亦くも后下の川をぬり
花ノリノと云ふ法守紹巴ノリノの法は能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
るは能借の法は能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
下畧ノリノ或恩記ハ能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
は後自の五りハ連奇花の法は能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休
りて終る所は能借の式目也又實文士年板仍の天水抄あり宗類昌休

事

○とてふれなきしあふを候して三と圓今の後りて出さずとも有
るしをきまればさきに書ふあらずや千梅の書の内より三巻
の内を二巻を茶湯さして大集の三と圓今の要馬九牛の
一もさす

一夜真引 冬ノ夜山中獸ヲ獵シ犬ヲ引ユニ獵師ノ詞ニヨコ引ト
云ク獵ノ内ニテモ先雪中ノ狸狩ヲ云トソ

○愚按師説冬夜鴨と云ふも云何しもせしむぬの獵し業と云ふ
獵しと限るべしは季の境山井よりく鴨を鴨を真引
鴨をよめれは獸も限るべし又まじくは老るるる
取鳥のくや業を法に法に取の炭

一擗 我ニ伐取タル木ノ根ヲ掘出シタルモノナリ關東ニテ根骨ト云

山家冬ノ炉ニ昼夜焼之ヲ寒ヲ凌クモノ也

我戀ハ擗タル山ノ尉カ閨 千律師

是慈鎮和尚ノ我戀ハ松ヲ時雨ノソノカ子テ真着カ原ニ風
サハグ也ト云ヘル夕ダヒニシテ心理無味ナル前凡情ヲ以テ汝は
スベキニアラズ

○愚按擗よつまゝ千律師の句とひさるるを凡情を沙汰
しよまはれは作ふし千那法師思ふも神人妙法
空向の所量の信はよく禪悟親切の如きし次やけるお家々の奇
擗
は擗るを教しきる老世の文をよむ家園の埋火
いふをて改令す人ト通俗志擗をよむも是より
昼夜たゞものありは擗の用は山家も擗るをよむ

お入り措きり命とて天は日の埋火とて一帯の事とての
を深く措の火をさしつて岩小わさくばを火と氣
降し奇不知火埋火火とて六束とてさたり山あり
らばさきさきとて山あり措きり埋火とて
二用とて一十那時中を能知す一史埋火の事
さつて固くす世をぬき一の句れ備きはさり
筆蹟清くばさしやぶる火の下におうとて
少川と多く多の事なり取仲の事

塔百
は川とて火の事なり人の事なりさつてさつて下はさつて
夏をさつて見れば律師の白の能さつてさつて九信の信
にぬきさつて見れば火の事なりさつて一白と邪語に入りとて
の事なり五形堂先生の句なり
埋火や底を採りてその見

けらと考つては秋の事なり
おさくそに見つては秋の事なり

一三二キ時雨二風ノ添タルヲ云フ風賦也

○愚按け注ハ雜書ニ時雨吹くは云々とてわが事なりあり
是とて刻りては「連奇新式」に白砂氣ハ世々定通
れ法説不同とて云々を採りては五白斗を云々
風の事なりとて「英」の事なりとて云々を採りては
みるに「昌隊」の曰くは「海田」の物なりとて「又
書」の事なりとて「風」の事なりとて「通俗志」曰くは「建
風」の事なりとて「二」の事なりとて「書」の事なりとて
風の事なりとて「吹」の事なりとて「採」の事なりとて

言言系抄の記述

浪の寄 伴良麩が崎と云ふ所は清くせよ

浦の風のまろくも芭蕉の香もよ

三日月の連芳は言あれはも言ふ

雲とる通俗志の記述可也

と云ふ所は

焼やしやい

とある成た之

も山の浮言吹

あはれ推一

あはれ推一

十一月

一相嘗祭 上卯日是ノ祭神祇令ニ曰 住吉 大和 三輪

穴師 恩地 意富 着城 鴨 紀ノ日ノ前等ノ神主各

官幣ヲ受テ執行ス之トミ 下畧

○愚按右の往ハ事相原の通シ

正さるしや又九社

あれハ神祇令此本書

味と云ふ也

少ハ九社

住吉 和列神主はる連 大和 和列山辺郡神主大和忌寸 大神 三輪神主

穴師 口城上郡穴師神主 恩智 何列高安郡恩智神主

此皆糸乃齒下

意富カツラキノカモ 和列十市郡神主大朝臣 葛木鴨カウシユ 和列着上郡神主鴨朝臣
 日前紀州名草郡 日前神主 神主の奉へ神祇令集解有
 着膝鴨 氏二はとやらしましり 着社傳大成の由ん
 着不鴨一言主ハ事代主命社二座ハ績友人

君と祈る只一言の祈め又二人のままからいまさん
 氏人

○五節帳臺の試より豊の明りの帯今とさ中相伝されハ
 往り及らず

一 小忌衣 山藍アサギノ袖 日蔭カケノ蔓カマ 心葉 是皆大尊會豊ノ明リ用
 ラルモノシ山藍ノ花ニ摺タル衣ハ是ヲ則小忌衣トシ小忌ノ
 殿上人ト云ハ此御神樂ノ役ニアタル殿上人ト云

○愚抄コト小忌衣コト次コト寸法コトホ香コトのつコトりコト畏コトれコトあコトれコト只コト祥コト園コトのコト注コトの
 指コトとコトちコト付コトけコトりコト山藍コトの花コトとコト摺コトるコトのコト小コト柄コトハコト山藍コトのコト葉コト先コト白コト布コト
 とコト粉コト張コトとコト小コト葉コト梅コト柳コト葉コト山コトをコトまコトやコト山藍コトれコト並コト肩コト集コトりコト
 これコトとコト摺コトすコトりコト柄コト不コト得コトあコトるコトとコト山藍コトハコト延コト種コトよりコトあコトるコトとコト
 時コトハコト地コトのコト叶コトとコト摺コトるコトはコト多コト摺コトのコト衣コトとコト赤コト紐コト洗コト手コト等コト種コト葉コト
 子コトハコト小忌コトのコト着コトとコト一コト丈コト四コト尺コト三コト寸コト又コト短コトきコトもコト小忌コトハコト右コトのコト肩コト
 へコトけコトはコト年コト人コトハコトたりコトとコトけコトるコトハコト腕コト腋コトのコトあコトきコトれコトのコト袖コト下コト伝コトへコトるコト
 故コト矣コトはコト多コト多コトれコトハコト是コトとコト累コト尺コト堂コト上コト堂コト下コト小忌コトとコト多コト尺コト皆コト白コト然コト
 厚コトとコト新コト靴コト撰コトちコトのコト冥コト白コトのコト奇コトとコト
 いコトるコトれコトハコト花コトハコトまコトまコトとコト小忌コトのコト衣コト小コト葉コトのコトむコトらコトん

一日蔭ノ蔓 ○松蘿サカリサカリ昔コト神代コト細女ウメの命コト日蔭コトのコトうコトとコトわコトとコトと
 ちコトくコト神樂コト奏コトせコトりコト神代コトのコト巻コト以コト多コト一コト是コトよりコトむコトらコトるコトとコトとコトと

兼書糸

一日薩ノ糸ノ冠 白糸或ハ緑ノ色糸ヲ組タルハ八條冠ノ左右ノ角ニ懸ケ
垂ル也是ハ畢竟松蘿ノカハリシ是等ノ事有職家ノ秘文ニシテ
此ニアラスモ其憚アルコトナレドモ記セガハ其アマ分タルニ畧記之
侍ル松蘿ハ生ハ至極清ケレトモ猿芋纏ト名付テ其形バサケタル
苔蘿ナレハ今錦繡ノ美麗ナル衣冠ニハ取合ス依テ今世松蘿ヲ
止テ日薩ノ糸ノ鮮麗ナルニ易トソ神代ノ古風モ自然トス多ク物毎
只美麗ニナル而已シト云々

○愚按足忘説シ千梅地下トシテ上ノ汁ノ詞其飛物トシテ
神代ノ古風廢リ美麗ト易クシテハ恐れありわが流俗ノ風俗
人ノ多クシテハ此流俗ハさるる事ナリト一貫ト云フ人ハ
足跡道ノ源ヲ知リテ其ノ松蘿ト云フ日薩ノ糸を
サリシ今ハ美麗ト云フ事ナリト云フ上ノ言ヲ得テ其ノ事ナリト云フ

足跡より故云ありて今世ハ其ノ事ナリト云フ一條神代
神代ニ曰日薩ノ糸紅ト云フ又ニ足跡ト云フ又平治秘記曰日薩
冠ト云フ通中子ニ云糸又品有之 余ハ生履ト用ユサ人或ハ紅ト用
冠ノ上ノリニ垂ル也今度嘉禎大嘗會通成朝臣用言糸ノ
日薩ヲ實基卿曰尤有其謂ト云フは紅子高なるありて
上ノ憚リてありハ其故云ありて糸ト云フ上ノ言ト云フ
生物ノ蔓ニ神代ノ古風廢ル事ナリト云フ上ノ言ト云フ
そのいしと云フ事ノ各師傳ト云フ事ナリト云フ上ノ言ト云フ
鏡書をみて云フ事ナリト云フ事ナリト云フ上ノ言ト云フ
云セリト云フ事ナリト云フ事ナリト云フ上ノ言ト云フ

一心葉ト云モノ日薩ノ糸冠ニ付モノノ御傘ニ曰心葉是從ニ知ル
人ナレ師傳ヲウクヘト云々按スルニ摠テ秘事トコトヲ謾リニ書

まあに年幸や二月

八子一ねめ女居

水引の神師の戸はまねりてまな記をてそを洗つては
つゝしてそを神を奉るの法符をまめりて

心葉ノ次

板心葉ト云ハ大掌會豊ノ明リノ小忌ニ當ルル人ノ冠上ノ飾リシ
金銀ヲ以テ松竹梅櫻兼ナントノ枝花ヲ作り冠上ノ拵ニ其拵金
ノ端ニ輪アリテソレニ日蔭ノ結ヲ結ヒ丹莖也當世加茂ノ臨時ノ祭ニ
神入日蔭ノ糸ノ冠ヲ着ヌ其冠上ニ色糸ヲ以テ作りタル花ヲサス
是心葉ノ畧シ以上大掌會豊ノ明リノ一件如是尚此餘出前師付
ノ微細ヲ袖中雜譚ニ有

○愚按ト云フ心葉ト云ハ通俗志ハ心葉深ク多リ申出モ
御傘ノ貞徳の姫ノ知方人ノ所作を云フハ心葉は

はらうはま梅のふさねは心葉ハまね梅下よ出て著く世おわたり
萩の志かりよま心葉深く多しはあつたる銀糸又まねの糸日
新よよて冠のふさねはま金糸梅の枝より冠より
まねはま心葉ハ又法合ありと云又法合まねありと云
亦有つてまねはま心葉ハまねの足糸はまねの足糸ハ心葉の
大意に受此一信あり貞徳の師付と云ハ心葉ハまねはま
かまの梅を心葉といふ心葉はまねの梅はまねの梅ハ

新巻撰集新掌會中記ハあつたの奇

三川の山下日蔭くまのまねはま心葉ハまねの梅ハ

又連弁ハまねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハ

入はらうはま心葉ハまねの梅ハまねの梅ハ

まねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハ
まねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハ
まねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハまねの梅ハ

祥園のほ説 八心葉の梅乃三寸半刻中子三寸 下畧 杖藜ホ
の製あれも足とふ記はるのりしとて 拙者飾研ふはも
かしまも侍定りてハ解しとてのこ貞徳心葉一傳の
切紙二祀茅室を推小新ノコマテ記し並れて推家侍之

一東三條ノ御神樂 下卯日 是年中行事公事根漁等ニ云載依テ
何ノ神社ノ神樂ト云事ヲ知レル者ナシ下畧

○愚拙拾芥抄ノ重明親王の事或曰くささうしは平が大成小園史未
考今等て記し多り是非と傳して此傳の助ふありは政通俗忘等傳
除さうるを此書くこと名目此傳のな材とゆれば小略記もし
此傳も是れ石月と云りて下も是し傳もあつた可く志めて破
つらふあり

一夕澄人小夜澄人 神樂ヲ諷ノ人ヲ云丸夜分冬ニ

ノラヤニハハノ磐戸モ明又ハハ小夜澄人ノ諷ヲ神樂ニ

○愚拙是の事もて載されしも神楽ヲサテ切りの人ハ心
あまし詞林詞林材ノ言のりたす人故て小夜澄人ト云
引が 各居りて人々の事しと神も心をサシケル
又薦るるなり

凡しハハハ小夜澄人ヤまりしと云

一御火焼 八日 則子祭ノ諸社行ハリ中ニ稻荷ノ御火焼ガニガク嚴重シ
京俗ホメケト云フ日灯心ノ賣買ヲ子灯心ト云ニ子祭ノ灯心
ヲ燈セハ則諸厄氣ヲ被ツテ家内無災福ト云

○愚按をきくは、所火焼子多り吹葦奈八日とつげあふ
混雜して所火焼八日別子多りと云行りまや三ツの相各
邪くおろりて蕉門の月ひて千載の笑後とらうり西行
とてかかひのりをもの能士はらうり一故小をくぬきの
ケまよふてまうり

所火焼 オホタキ 子日と云ざるは社祭日送らるるは火焼とて
オヒタケ

け月社祭の祭日社祭とて執行庭燎是十月の極陰の時節
多しハ神ハ陽射すを後せりまよりて十月の陰ハ伏して社祭
なり一其祭月とすらん如き事とい月一陽月後まきは社祭
なすふ時をまよらるる程の中絶し火陽とて云ふまよりの
諸記にありし雲ハ神祇集令の他國中ハ神社の教九言
九言所神祇官式内百八十四ヶ所ハ儀々ト部序ありしハ
終りまより多し又社祭の儀外ありハ凡俗の儀ハ云ふ

極陰の月ハ云や中社祭ありしハ意多るるは極陰の時節なり
まよる社祭のまより時再々まよるハ大合しハ一團なれば社祭は
まよりまより多し到るまよりハ示しハまより多しまよりて火陽
とてハ社祭月ハ庭燎ありしハ八日と云ふるまより

子祭りハ八月と云は十月甲子の日京師表日の民俗大黒天と云る黒豆
黒豆と服と云一ニ股うらハ大黒豆方めて佳良大己貴と云ハ日本
万家の中一社なれば干支の初に祭るなりハはやまの十一月ハ
甲子の日まよりハ社祭のまより多しまより多し儒家の後ハ周世子とて祭
者とい日本ハ大己貴と云るなり可く俗風ハ大己貴の儀ハ一や
りやまも亦下と云ハ日灯んとて求やまけハ灯ハ燈ハ又災と除くや
民俗の風流ハ子灯んと云り

吹葦奈 フイカサ 是八日掃帚のやけりハ流俗吹所掃地師一切吹葦をりらる
は秋月掃帚と云る中やハ流俗ハ掃帚ハ掃帚ハ今節のまより

八月に後長及十一月七日と俗に報法全の旨を奉りしといふことの
ものといふことと各八月に奉りしと云ふことと既にいふ
新玉は侍の所火焼十二日とあるをや

一大師諱 曾天台大師ノ所忌日と以敷山三井寺其外各家皆行
度民家と小豆粥ヲ焼テ食之近江ノ國中殊ニコレヲ嚴ニス

○愚拙天台大師ハ傳教大師のほゞしく六月四日今日ハ天台
智者大師の所忌日と云ふ釈書曰釈寂澄サキテ大師入唐して台別ダイ
親ミと天台山上登り圓清エンセイ寺の道遠ミチト和尚と云ふ和尙ハ智者大師
七世の孫といふ二歡の寺有はるに侍ありフヤウモシの文の發ホツゴ法ホツゴ
秘ヒシ旨シ頂テイ礼レイ天台大師と云ふより是侍教大師をさして天台
大師といふこと也と云ふ

一雪ユキニキ 時雨ニ雪風ノ吹リ降ルノ風体降物勿論ハ沫雪ト云モノ歌ニハ
大方春ニヨメリ俳諧モ句ニヨツテ可定

○愚拙ニキの條下は注の如くハ雲クモ之ノ考

一氷ヒラ狂 氷著軒ニ長ノ垂ラテ垂氷ト云則平ノ氷ヲ俗銀竹ノ字ヲツラ、
ト讀出取不審イフビシ李太白詩曰白雨映寒山ニヒシ森々似銀竹ト云是兩ナリ
ツラニアラス近來銀竹ト音ニテ句ニスル輩アリ不可也他ニ向ツテハ云ハス
蕉門ノ作者ハ不可イラ為ス之

○愚拙門人龜連同之坊山井と云ふこと今より通俗志ニ載ニ梅ノ
後可なりや春不可イ音トと云ふこと坊山井と云ふことと
坊山井と云ふことと坊山井と云ふことと坊山井と云ふことと

あはれつるまわりのしるはるまをまてとちりつる

小田のわりのち

わらうくあふくしあ小田の宿まやいりつるのち

け名月をまわは小田のころつる勢とつるも別注よみ秋のち

入るわらうまはつる

わくせり 煙き又細くも

けはれつるのちあはるまをまてあはる人あはれ

わくせりふ二條をまはけお退きわらうまあおのち百千作の

紙あまのちつる温故日深あまらり

一寒苦鳥

此鳥吾朝及中華朝鮮ニモナシ佛經ニ説アリトソ天竺

印度ノ境大雪山ニ鳥アリ名付テ寒苦鳥ト云此鳥夜寒ニ苦ミテ

鳴テ曰寒苦身ヲ責夜明テバ棄テ造ラシ明テ又鳴テ曰今日不知

死又不知明日何カ故ニ巢ヲ造ラテ無常ノ身ヲ安ク穩ニモト此經ノ心ヲ
後京極振政良實

朝ナク雪ノ太山ニ鳴鳥ノ聲ニヲトク人ノナキ哉

以上師説ヲ以テ當座ニ書記スルニテ再聞セス文字言句ノ違可
有見之ヲ人其趣意ノミヲ可辨

○愚拙師後又自言クまお違けり其行集まあやうり日云振て雪山ハ
沮繁經半偈投身より住鳥ナクハま常と習ふる也くも又松の
枝おあやもあくおつたまはつるも六つあはるのちりあはる
ものねらう上るうへ一テ師後ハたきまわあれもまの天竺の
るんはれはりあはるのちあはる載るる言中又はるも寒おふはる
とて身をまはつるも水入熱をりて樹まらるも寒と寒
まて苦くまらるるやあはるもあはるもあはるもあはる

非皆系刀

延文の比重後院官は奇

延文の比重後院官は奇 延文の比重後院官は奇

延文の比重後院官は奇 延文の比重後院官は奇

增

鯨 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突 鯨突

花鯨 鯨の難 鯨の難

誹諧大底ニ玄鯨の取と輝と云永御鯨 元江鯨 輝くあり
艇舩 二下と云る如くツウカイと云い舩 二鯨舩 二艘ツツウ合せて
七十二艘出づ九人教千八百人
先鯨と云る時四方の山をくゞ鯨 鯨ある時ハ合書の 船 船と云る
時おねん及ぼるも本で合意と先鯨 鯨 二入主波と 鯨と云
合意の二下と云くも 延文の比重後院官は奇 延文の比重後院官は奇

死に後見親と頼り死する時西之徳と及國より射す魚にて信に
近ては花野待御ありと云々

早太郎不之氣と云々又云々て取らるる魚更は
昔に於て射さるる魚の古名はハシラキと云々ハシラキのイサナは鯨の
異名也又鯨ハ鯨唯ハ鯨也異物志に見るる

一杜父魚 ^{カシラ} 是北國ニテ雪霰ノ降時取魚ト云績懷義集ニ

カシラフツヤ腹ヲ並ニテ降霰 此コト書河豚ノ大サニテ
水上ニ浮ク越ノ川ニノミ有魚ト云々下畧

○愚按千梅大和本州ニ於て俗名を替るけしもの多し種別也其所
ノて鯨石トシガニギホウ類也ト云 石喰ヒ砂シヒ是等之類也
諸國ニ又俗名多ク一様別名ナク云々

松聖先聖書杜父魚カシラフツヤ腹ヲ並ニテ降霰ト云云カシラ
半又ス人 小能魚類篇ニハサメニミスナホリ背ニ針アリテキスニ
似タリ形チ丸シハセト云大ナルヲウバント云大和本州ニ毒イセネ
和名甚多シワタウスヒ近江ニテドウニト云々又曰石班魚ウシヒ
江ナニテハウダイハ大ニチニコト云云前ニ云ニル 稻川松岡西先生郡山
押先生流後其秘法也

善うぐひまの石ウバ 杜父魚又沙魚云々杜父魚云々カシラ
石ウバは海魚と云々其の石ウバは海魚と云々杜父魚又沙魚の名産
沙魚の石ウバは海魚と云々其の石ウバは海魚と云々杜父魚又沙魚の名産
其の石ウバは海魚と云々其の石ウバは海魚と云々杜父魚又沙魚の名産

一雪車 ^{ソリ} 雪船ノ浮雪ノ時旅人及荷物ヲ載テ押引之綱貫棒ト云ハトモニ雪沓
ノ事也

服皆糸の類

○愚拙者好^カる^ルは^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 網^ノ更^ハり^ハを^サてし
操^ハ又^ハ車^ハ又^ハ雪^ハ車^ハと^シて^ハ 堀^ノ川^ノ 泥^ヲ 奔^ラる^ル 夫^ノ 房^ノの^ノ奇^ノ

神^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

敷^ノの^ノわ^リの^ノ押^リの^ノあ^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

一^ニ操^ハカ^ニキ^トし^テ 越^ス越^スと^シて^ハ 子^ノ
其^ノ 四^ノ 三^ノ 里^ノ 五^ノ 里^ノ 七^ノ 里^ノ 十^ノ 里^ノ 一^ノ 日^ノ 一^ノ 夜^ノ 一^ノ 日^ノ 一^ノ 夜^ノ 一^ノ 日^ノ 一^ノ 夜^ノ 一^ニ 操^ハカ^ニキ^トし^テ 越^ス越^スと^シて^ハ 子^ノ

幾^ノ日^ノ浮^ルの^ノま^ハり^ハ 太^平紀^ノ 十^八卷^ノ 白^里見^レ停^マル^ル 大^好と^シて^ハ

新^レ田^ノ義^ノ治^ハ 五^千余^人と^シ 金^々崎^ノ 後^ノ法^ノの^ノあ^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

吹^テ音^ノの^ノ月^ノを^ノノ^リて^ハ 抽^クの^ノ具^ヲ 上^ニ 下^ニ 兼^テ 走^ラる^ル 一^ニ 踏^ラ紐^ノの^ノ上^ニ 後^ノと^シて^ハ 山^ノ路^ノ 八^里 一^日 行^ク 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

を^レ是^レと^シて^ハ 西^行を^サて^ハ 有^テ 奇^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

夫^レ本^ノ集^ノ 沖^ノの^ノ奇^ノ 夫^レ本^ノ集^ノ 沖^ノの^ノ奇^ノ 夫^レ本^ノ集^ノ 沖^ノの^ノ奇^ノ

か^レと^シて^ハ 越^ス越^スと^シて^ハ 子^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

西^ノの^ノ奇^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

二十^日月^ノより^ハ 三^月まで^ハ 吾^ガの^ノ月^ノを^ノノ^リて^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

つ^じひ^ハ 越^ス越^スと^シて^ハ 子^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

お^おし^らぬ^と 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

山^ノ路^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

一^トと^シて^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

り^らぬ^と 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ 操^ハ又^ハ吾^ガ輩^ノの^ノま^ハり^ハ

増 富士の宮より新と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
百身之能事 四子の浦より新と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
口 四子の浦より新と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 二子より赤人の言は是言新と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 四子の浦より新と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 終ふてと云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 交りてと云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 ありてと云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり
 と云言おふ宮の初言今に冬に用也とあり

十二月

一天智天皇御國忌^{ゴキ} 江洲志賀郡崇福寺^{ソウフジ}ニ行^{ユク}之天智帝近江國
 二都ヲ用キ玉フ時先求勝地^{カチ}一區ノ大伽藍^{カラン}ヲ建立^{ツクリ}シ玉フ是崇福寺
 今ノ志賀寺^{シカガ}之天智帝ハ甲與^{ヨシ}聖主^{ミヤ}ニテ御座^{ミマサ}ニ依^{ヨリ}テ御國忌^{ゴキ}末代
 ニモ廢スルコトナシ大祖^{オホソノ}廟^{ミヤ}トモ甲ヘキニヤ以上公事根源

○愚按御國忌ハ天武天皇朱鳥二年より初より朱鳥二年迄一
 終るゆゑ年持統天皇元年又天智帝と申真^{マコト}朝敵^{チカ}入唐^{トウ}と
 誅討^{ツバツ}一天下と治^{ツラシ}むる中興^{ナカノキヨブシ}の主^{ヌシ}祖^{ソノ}廟^{ミヤ}事^{コト}先^マ芽^メ六^ム末^マ日^ヒ
 王室^{ミヤノミヤ}中^{ナカ}存^{ゾク}而^{シテ}再^{ヒト}真^{マコト}謂^{イハレ}之中^{ナカ}真^{マコト}如^ニ周^{シユ}室^{シツ}王^{オウ}漢^{カン}光^{クワン}武^ブ唐^{トウ}中^{ナカ}宗^{ソウ}ト

掌之りて天より道を通りて山門無事よりゆきてい樹りふ
者して流るれ神のまじりてと上り行夜神の養屋新宮此樹
下流るの神と秘伝をて山田の所師とみふ人わくしは
しとばりそりれ

大成畧信

一岡見スル 大卅日高キ岡ニ登テ明年ノ氣ヲ見ル陰陽師曆ト者ノスル
コトナリ

○愚抄温故目錄曰大卅日の夜とて岡ニ登リ羨をさうしまた
とてくくくふ我あをるれあなる年あをるる山のみふるる
松川下り修験の年
こしは海のみぢりてふふふとて松さうふ年八部
こしは海の年のちまおとて

一年ノ終ノ鬼祭 昔ハ大卅日ニ盃蘭盆ト同シク鬼祭シケル徒然抄ニ曰
上畧 卅日ノ夜イトフ暗キニ松トモ灯シテ夜中人ノ門敲キ走リアリキテ
何事ニカ有ニトト敷言リテ足ヲ空ニ迷フカ曉方ヨリサスガニ音ナク
成スルコソ年ノ名ヨリモ心ボソケレ七人ノ来ル夜トテ鬼祭ルワガハ此ノ頃
都ニハ無キヲ東ノ方ニハ猶スル事ニテ有ケニコソ哀ナリシカトミ兼好
時代テテ東国ニハ大卅日ノ夜ノ聖天祭猶アリタリトモユ

○愚抄通俗志ト是と除るれども古昔ねまうたれお宿まはゆね
とまおのいぐら作まて好たのおよ
おまの年の終りてはりたりとて又やあつんとすん
後信しつて武部
さう人のあつてすきと厚きり我信あや玉の
信か細雲の白ゆりのせをて解走の飛りてはるる人のいぬ

今世を以て
 人王三千八代齊明天皇五年七月諸國法寺小孟宗經を護せし後
 世孟宗會是之後礎礎の節して東の方にもあり多きや川の
 比るに月のまゝ小混合するや孟宗會令の隆恩依にこそあせて
 七月にありてを故に守りてありて其のまゝとすべしと
 報恩經ニ曰

二月十五日寅ノ時来テ次日午時去 五月十五日卯ノ時来テ次日巳ノ時去
 七月十日卯ノ時来テ十六日午時去 八月十五日辰ノ時来テ次日申ノ時去
 九月十六日未ノ時来テ次日申時去 十月廿日午ノ時来テ正月一日卯時去
 一ノ年のうゝ式祓祓時代の意をありとす又師のうゝ
 一ノ修むまを水終てありて 五教堂
 是は色々の又とすて作せしむ

一和布刈ノ神事廿日ノ夜 本文ノ註畧之

○愚按和布刈の神事の事ハ諸書異説多ク豊前國早稲又
 隼部社祭神一座火酢芥命一説ニ夜火々出見の事と云れせし
 多居の額ハ隼人大明神と有 隼人ニテ火圃の命也 旭和布名を記すにハ
 古門のふとあり住む所門司赤間ノ地濱と云ふ同五百壇の園と稱り
 ともとの古門の内よりハ皇后三韓は征討後りの所と云ふ里平の
 切と云ふ古壇と海庭と云て今世も頼公豊前守の地と云ふ
 石壇海入常に千階と云ふ石壇と名赤間今下の園と云ふの事
 門司今そまの代別と云ふ事又古門赤浦の所住古明神の行と云ふ
 事と云ふ事小膳系の地毎年十二月廿日の夜その別と云ふ社の神人
 ねをわげと及方一時お彼石壇と云ふ所をたへひと中と云ふ社人
 其の事と云ふ事と云ふ和布と一壇刈る月と云ふ事と云ふ二壇と云ふ事

言言系七卷一

御社ノ名ハ其ノ社ノ神祕アリクニハ先世ノ刻ハハ原アリクニ
トモ其ノ社ノ社ノ神火ノ名アリクニハ社及ハ海ノ名アリクニハ
灯ノ名アリクニハ海ノ名アリクニハ社ノ名アリクニハ社ノ名アリクニ
九日本神社ノ名アリクニハ社ノ名アリクニハ社ノ名アリクニハ社ノ名アリクニ
初社推本舊名ノ説

五百壇のばらり〜〜〜の春

篋籙輪イロハ寄名目之内

① 一岩船山 河内ノ国交野郡有山頂ニ大サ五丈ハカリノ山ニテ造リタル
船アリ人作ニアラス神物ノ神書ニ下照姫 大國主命ノ天ノ船名船
ニ乘ジテ高津山ニ降臨シ玉フト云岩船トソ下照姫ノ社ハ摂州高津
ニ有リ今世俗仁徳天皇ノ社ト云爰ニ仁徳帝ノ御歌モアルハ後人
同社ニ祀ルモノカ其岩船ハ河内ノ国ニ止ツテ岩船山ト云高津ノ社ノ
舊地ト相去コト三里ノ活法ノ書ニ岩水辺ニアラス山類ト記セル
モノ哉ニ此岩船ノ事ニサラハ白ヨリ神祇ニハ成ヘシ
仁徳天皇

飛ヒカケルアミノ岩船尋テソ高津ノ里ニ宮作りケル

非皆系四卷一

○愚按下つて後岩船とて改修し多のハ支也山岩船とて極り
 五二里もほつて高津と附合せり其場の作文にひつて又
 及び詠ち山岩船とてありも内山岩船といふ人足岩船の本
 持と云われぬ凡岩船は詠ち多し故に其本を指すは内山
 ありあり

可多末角磨の舟
 久し夫の探女が船の海に津の海にあり

は上曰天の探女が船とて改修し多のハ支也山岩船とて極り
 角磨探女とて下懸の別名と云 上は船名
 志れも此岩船といふは又あり津の船とて
 天津國津ト津岩船と云ふは又あり津の社の事
 延喜式に探女は賣許曾の神社にて旧跡定りし今の高
 津の社の旧郡の代りて聖皇の神廟の後人境内には賣許曾月をん

神祠とて今を改 又は賣許曾と下照船と 探女とトて

信とて日記舊事紀に高懸怪談の神祠と云ふ
 宗仁紀舊事本記和解加羅國の奴我阿羅斯黃牛の價小神は
 まるに名を我國房に云ふ息女と云ふ阿羅斯人にて其令せ
 と云ふ阿羅斯人にて其令せと云ふ阿羅斯人にて其令せ
 追尋て求ふは遠くしては賣許曾の神社と云ふ岩船又神祠
 新古今集抄に三統理平の舟

飛翔る天の岩船舟にて其秋津修し六之神あり
 信上白天の岩船天より降りしその名は山岩船と云ふ
 けは東常後河川言ふ合はの後之舟と云ふ天の舟船と云ふ
 あるに山岩船本紀と云ふ石楠船の舟と云ふ天の舟船の舟
 と云ふ舟と云ふ舟と云ふ舟と云ふ舟と云ふ舟と云ふ舟と云ふ舟

一、初汝 同ノ八月ノ大汝ニ初ノ字用ユルハ不審之曰初ノ字ニアラス
 或記ニ葉月ノ汝ト云略シト云リ此説最ヨロシク月皇月ノ波ヲ
 ヲノミサナミト云シト云ク

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

ハ

是ナラシ

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

〇愚按芝師の脱ハ月年申ふと云れて大汝なる所初汝と云へば林ハ
 全氣ノ一ニ全氣水^{ササ}五^{ササ}行ノ事ト云レバ別^{ササ}の^{ササ}下^{ササ}地^{ササ}の
 有^{ササ}お^{ササ}甚^{ササ}ど^{ササ}の^{ササ}者^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}水^{ササ}ハ^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}却^{ササ}シ^{ササ}盛^{ササ}ニ^{ササ}月^{ササ}ハ^{ササ}林^{ササ}ト
 云^{ササ}ク^{ササ}又^{ササ}上^{ササ}流^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}ル^{ササ}也^{ササ}又^{ササ}葉^{ササ}月^{ササ}ト^{ササ}云^{ササ}レ^{ササ}テ^{ササ}若^{ササ}全^{ササ}を^{ササ}以^{ササ}て^{ササ}

茶の月... 連寺... 八月... 新茶... かく...
りん...
りん...

茶子 注法ノ書ニカキ茶新茶春ト記凡茶摘ト云ト新茶ト云ニ
差別アリ故ニ春夏ノ論アリ三月ノ部ニモ略記スソレ茶ハ洛東
建仁寺ノ用山千光園師宋ニ入テ好茶ノ種ヲ獲タカ来リ後柵ノ尾ノ
明惠上人ニ與フ依テ柵ノ尾ニ植始之ラ後鳥羽院ノ御時之其ノ千
宇治ニ移ス從是先本朝ニ有茶トイヘトモ可賞翫モノニアラストソ
然レハ茶ハ宇治ヲ元トス茶摘春ト究メタルハ宇治ノ茶摘之其
嶺葉ヲ摘ユヘニ他州ヨリ世余モ他州ニ茶ヲツムハ四月半五月エカ
カル翁ノ句ニ

木カクシテ茶摘モ聞ヤホトノキス

是世間茶ヲツム時候ヲセラレタル句ニ叔新茶ト云時ハ是ヲ製衣ニ納ス

テ諸國エ馳リ出シ或ハ先ニテ賞味スル時ヲ云然レハ夏勿論之既ニ夏
切茶ト云モノ六月ノ取ニ出タリ是則新茶之サレハ茶ツミカキ茶葉ハコ柵ナ
ト云句其時節カラトモニ宇治ト聞ユルハ最春新茶ヲ風味之又其自
ニ等ヲ賞スル句ハ夏ニ季細ニ辨スレハ如是先ハ茶摘春新茶夏ト可
心得コレ師説ク

○愚拙茶の来ライ可ユ何故茶つゝわと茶葉採テ了リ了レけレれルに
茶道心ウけテ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ... 通俗志ニ
茶摘ハ始メ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ... 三月の茶ヲ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ...
夏三月キ以後ニ夏切茶ニ月ヲ切リ先ニ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ...
是ハ子ノ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ... 茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ...
その外は茶師の内室ト云テ茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ... 茶ノ心ヲ通ス俗志ト云テ...

家くそ後よりその是より後下輝の事なりと四年の事
試みの茶としてらるる陶器に入茶師来内及の法園茶の
為空の方へ送る茶子と茶の茶とを遠近に送るは
アおれおと事とに教考者なり四月八日より風爐と出し和る是
よりして新茶古茶の名ありて之夏は後又六月より夏切茶
とて六茶夏は用也字法信業より出るとや風炉は用ゆるは
るより後一茶割茶之カア口を切て丸の茶道に用れを
まらわら一茶道の名にて深きうけける茶つとありの地
とて郭と名味のらるるをてを茶道と深き國にて徳武を
るるを足るべき茶の法は東波志林日付あり付器と庭
雨水とて茶とを煮は一佳味とて又雪水も可くとて

二女
云カテモ只一ツト書と記セリ是應安ノ趣ニ俳諧ニ入用ノ

文字く女一カ女ノ間ニツ女一ツト畧

○愚拙者くある通俗志より定て是喜傳元年物教にて五十迄近く
用ひ多きなりとて一通俗志式に曰 女一とて一女而女房
ト女ありけいも嫁娘者哉ホ一而去りて市女姉女妹の女
にも西く姉妹の類なりとて七の女ありの姉ハ姉妹姉妹と
娘の稱なりとて名を捨てて社物を教ふ事とて外とあるは是也

一霞ノ谷 城州深草ノ北ニアリ活法ノ書ニムサトセ又事ト云九ハ八雲
御抄ニ霞ノ谷山城奥州但山城ノ霞ノ谷ハ憚ルコト有ト云古今集
深州ノ帝ノ御国忌ニ
文屋康秀
州深キ霞ノ谷ニ影カクシ照日ノクレシ今日ニマハアラヌ

○愚按通俗志より名玉類に非摩とありのい意は所抄に
 輝くとの以後の五十四代仁明帝崩御の後火葬止むりして不
 葬もつて後の月々拾遺抄に吉祥なる細りありあり方角抄
 二日夜の谷とて八雲宮宮庭の南より及貞宮院の谷とて北に
 こと大盛

一萱カマフキ 御筆ニ是秋ニモ植物ニ成レシキ道理ナレトモ季詞大切
 ナレハ各草ノ分カクテモ秋ニモニ秋ニテハ植物ニモ二句ハ去ヘレトシク
 凡テ御筆編集ノ時事甚無教ニヨフテ如此ノ了簡多シ屋根ニ萱
 テ何十年ニモナルモノ秋季植物ニ用ヒカタシ外物ニ唯ニテ却テ不宜
 式トトフサアラハ櫻ノ盤躑躅ノ筒モ春季植物トシ鮭鯉ノ類ノ鱈モ
 季ニ用ヒ生類ニ二句去トセ子ハ不都合ニ世俳ハトモア蕉門ノ
 徒ハ不用之

○愚按蕉門一式と云々は御筆の信々奉らるるも一

通俗志より萱草カマフキ花をうらむ花柳の道も居るまじりて
 一推一泓の用捨一殿入江をみては月付のたふす秋ふり二
 四番の花信風フユキ子コ棟ト之ノ和歌に村舟ムラフネとていニ花遊ハナユふり
 するは花のたよりとて四家の風流を教くの花之御筆のさ
 事もあはれとて空想とてむらりり人花柳の道の下は
 御筆の歌へのさより空言およりせりりて押て奉らるる後
 ニテケ修シユ下ゲ及キ連レンと能ノのノ名刺ナハとて毛人モウジンのノ能ノ枯コ経ケイ有ユ智チ
 の二文を例レしつゝもつて以ヒ非ヒ祖ソとてさるは御筆の五終ゴシュウらん子
 ある一ニ沈シヅ山ヤマ書ショ三百サン條ジョウの張ハつらん能ノ道ミチとてさるは御筆の
 長ナガく又マタ修シユ下ゲの二ヶ条ニカジョウ之ノ編ヒ集シユの附ツキ書ショの無ム教キョウふら
 るるありとてさるは御筆の長ナガく又マタ修シユ下ゲの二ヶ条ニカジョウ之ノ編ヒ集シユ
 千梅チバイとてさるは御筆の長ナガく又マタ修シユ下ゲの二ヶ条ニカジョウ之ノ編ヒ集シユ

一カハルマタ 堂ノ破風ニアル墓股ノ木ト云モノ

○愚按東近江ノ六堂伽藍も掃きなり貴門人多きゆへに
才未満の小火より多かりけり後の本寺は
去り破風の上より懸魚下へ墓股と云凡般舎亦送りの
名目皆水縁とて火災を除く事不謂然矣墓股天井
形及び巴の瓦ハ波の文

一亀井 摂州天王寺ニアリ

後拾遺 ヨロツ代ヲスメル亀井ノ水マサハ富ノ小川ノ流レナルラシ

○愚按此亦ハ大和の國ノ小川の東多くひけり然るも天王寺不
多相送方のい亀井の水も和州平群郡^{イカルカ}波旭宮の^{石子の傍にあり}

ゆくりお流るゝ名の小川とてこれとて母の流るゝとて
天王寺金堂のうしろに龍池あり流れきて秘設あり石の
ひまわり水のこぼれ漏るゝ白石お出の水とて
^{大政大臣}
^{上五口院}
御寺七月ナリ治本流とてい亀井とて流り

一竹植ル 夏ノ翁夏ノ發句ニ

降ラストモ竹植ル日ハミノト笠

○愚按右も竹植るゝとて夏とて竹を植るゝとて夏とて竹を植るゝとて
不即して竹を植るゝとて五月十三日小笠とて竹を植るゝとて
とて竹を植るゝとて五月十三日古人謂之竹解日又謂之

紙すき直る甚質の徒去ふ風儀の甚著ついで封向せんと
 つも自その文種をさるるも篤多額あり紐師と稱せり
 よのふ教のあり通俗を以て大黒神祇とて其を味と
 不書まじやい一條の天水抄より至る風真中一のりて
 推門の徒へ通俗志の用捨のゆゑ一平之風推本篤多と中興
 とて修練し移るるも皆自徳名の全流へ傳ふ傳ふ真多あり
 おく其本亂まら末流のありや意を深をそめんと

一ナカ神 順ノ和名抄曰百鬼經二天一神 和名那加、美天女ノ化現之亦
 大白神ト云 新撰陰陽書ニ和名比土夜女久里ト云々 大白神トハ
 大白星ノ事ヲ云カ大白ハ俗ニ云宵ノ明星ニメ一夜ニ周天ヌト云リ
 依テ一夜メダリト云ナラシ又厚塩帥曰天一神方伯是フタカリノ
 神ニ五條ノ天神カト云々 源氏物語 註ニ天一神中神長神兩様ノ

道祖神カト云リ中神長神兩様ト云註ハ和名抄ニ那加、美ト云ルハ中ノ
 字カ長ノ字カ知シカタキト云義ハ右ニ説四説皆相違シテ不交按ルニ
 是道家ニ立タル神ニメ神祇門ニハナキ神ノ畢竟天一神ト云ハ方伯ノ
 方違ノ神ノ曆二天一天上ト云ハ百事忌ナレト云々然レハ方角ノ忌キ
 方ヲフタキテ守ル神ナルニヨツテ道祖神ト云モ一理ノ下畧

○愚按諸書として交々々々本朝神祇門ノ二神と云れり
 徳後ノ上巻よりハ已々人言を承るも自見たりとて遠く
 本朝ノ神代より有テ今世ニ至ル所ありと云々ハ先和名抄の天一
 神那加、美 彦彦州の方伯ト云々の神源氏の往々中神
 長神五條ノ道祖神とあり是二神ノ皆別名ト云々中ノ
 明々々々ハ附合の誤ト云々天一神ハ天女ノ化身長神ト云々の神
 とハ大將軍の神ノ神祇ト云々神代大山祇の法女磐長根ノ神城の

四方に大將軍の社とて是く神代小大山祇の子女姉と磐長姫と
 木花田耶姫と姉の國を磐長姫の容赦者醜天孫の幸あつて
 乙姫と妹とありて吹嘘ありて悪神を逐ふ妹幸なる女神とて
 はんく邪を去る人となりの神とて是く避る方違とては中央の神
 後田彦大神是道祖神と申神長神と申たりて三光院殿の後
 幸吟の従ふは是の方物成の文中に後田彦志也非大將軍道祖
 神との名をへは又とてはるる中神のひもはなりけ神長神
 とて大和とてはるるやうにけはるる我朝の事も中神古神功を
 是後小坂の隣は船と入るるは紀伊郡入るる方違とてはるる
 塔の浦とてはるるは紀伊郡入るる方違とてはるる
 今もその地を去るる方違神とてはるる是後田彦大神とてはるる
 道祖神とてはるるのいけ地の上は塔とてはるるはるるはるる
 とてはるる方違の災を去るるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

毎年五月廿日祭礼は日土祭とて法人を交へて又磐長姫命を
 土公といふ別後田彦の神孫とて方違玉串を神代より神火とてはるる
 齋祭とてはるる異邦に去る神の國有りてはるるはるるはるるはるるはるる
 定表とてはるる足守治の土公とて神國とてはるるはるるはるるはるるはるる
 去る神後田彦とてはるる神とてはるるはるるはるるはるるはるるはるる
 考とてはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
 りはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

- 巳酉日より六日辰方
- 乙卯日より五日東方
- 庚申日より六日巽方
- 丙寅日より五日南方
- 辛未日より六日坤方
- 丁未日より五日西方
- 壬午日より六日乾方
- 戊子日より五日北方

右十四日とて巡畢て癸己の日天一神天上より是曆の天一天上
 癸己の日より十六日とて天小をなはるる十六日八方へて降るはるる
 六十日とて天一天上へ曆とて六十一日とて天小をなはるる一切はるる

方違マタカケノナリシク陰陽家カゲの正設マサホカ目ハ存タマシルモ信シマラズ
神祕カミノ既世俗キセナリクモ板行イタの晴明ハヤヒ眞蓋マコト内傳ウチホ眞マコトののいふは
疑書ギシヨ眞マコトの眞蓋マコトハ土師ツチ門カド流家リウの秘書ヒシハ他見タふ所トコロ所トコロ存タマシル
地下チカよりヨリ去サレルあらむも神書カミハカケ存タマシル所カケトシ神カミ切キ皇ミコ后ノの神カミ祇ヒ
三イ斎イまするも金イ葉イ集イに

その他ノ一ヒト也ナリその神カミとシけレ存タマシル所カケトシ方違マタカケナリ

① 鶉ウ衣イ 他人タニノ短ミキ衣イヲシ然シトモ鶉ウヨリ出デタル詞コトニシテ秋季アキトスル
ナレハ生類ナマニ句ク去サトス

○愚按オモヒふぐフ衣イ林ハヤシ衣イ生ナマ衣イ寝ネ衣イ保ホ綱ツナ 妻メの衣イ衣イ
生ナマ衣イ保ホ綱ツナ 妻メの衣イ

一 松嶋 御傘ミカサニ曰イハ松嶋マツシマ松マツカ浦ウラ等ナドハ其前ミマエニ松マツアリトモ見ミヘス只昔イマヨリノ名
分ワリノ故ユニ非ヒ植物シヨク松マツニハ三句ミク去サトス是コト負ツ徳トク翁オウノ松嶋マツシマ雄オス嶋シマノ
塚ツツニ列ツテ見ミラレズ只書籍シヨクノウエニテノ捌ハキ大オホ蕉セン翁オウノ曰イハソレ俳諧ハイハ學マナ文ブ
書籍シヨクノ上ウノコトニアラス世變セヘンニワタリテ功コウ有アモノ、怪オモシニ見ミ届トケ固カタ定マ
タルヲ以テ證シトスベシトゾ松嶋マツシマノ諸嶋シヨ自然シゼンニ皆ミ松マツアリ尤モト山ヤマ類ルイ水邊ミヅノヘ
植物シヨクノ松マツ五句イツク去サトスベシトス平ヒラ行ユキテ試シ之ノ島シマノ數カズカゾヘ尽ツクシガ多オホク俗
八百ヤチ八嶋ハツシマト云イハ其中ナカニ松マツナキ嶋シマ裸ハダカ島シマトモ余オノハ乘ノリテ松マツ有アテ無ナシ地チ木キカ
古記コキニカハラズ植物シヨクニ三百サン松マツニハ五句イツク去サトス

○愚按オモヒ門カド人ヒト洞アナ旁ナド回マヒ之ノ冬フユヲ云イハ通俗トクホク志シの後ノチ可カ知チ存タマシル所カケトシ水邊ミヅノヘ山
衣イ末マタの松マツハ名ナ存タマシル所カケトシ松嶋マツシマノ名ナ存タマシル所カケトシ
之ノ松嶋マツシマノ名ナ存タマシル所カケトシ松嶋マツシマノ名ナ存タマシル所カケトシ
之ノ又マタカケトシ松嶋マツシマノ名ナ存タマシル所カケトシ松嶋マツシマノ名ナ存タマシル所カケトシ

事人ふふ社師と強は邪智其其西ふけりて書籍くつてはねく
 とあねと道門の難信二千歳の若れ居りて周の世史記とてまき
 吉島へわくふ浦はく人畜の標のまき用也是支考天台の御書
 坊は居のまき色一難信後ふせりて五福て千神とい書り組
 せりやて貞運と破しひきりて支考入唐後天の御法とい書り
 少すは書籍の上は論くは書又公のゆへ事根原及び三子固令
 大和本州の書より自見といて二百十條の撰りといふ人又芭蕉の
 信は言傳の詭詭の荆蕪といふも書りて支考と忽送と信といふ
 破り後て芭蕉居る名刺といふりて一生点たる俳諧といふ好いんや
 点下といふのありて芭蕉片はとん判せりまゝて只花小舟とい
 ねだれといふ信は史といふまのなま芭蕉のゆへ、許は書籍といふ
 竹を今といへて隘下曲水の文中余教と白上の文畧

一 凡種のおとら船九世と云ふふあるく一と云ふと云ふは

一 傍原といふといふ道といふといふて是りといふのなり信
 凡種のおとら船九世といふといふは芭蕉の書に後といふ
 左のまき金をて信りといふといふはせんといふ信といふといふ
 とつてて書るまうて月といふ信は九世といふ信は人といふといふ
 といふといふ信は二世といふまき信といふの信は信は信は
 のといふといふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 といふのなりといふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 といふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 信を信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 といふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 といふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は
 といふ信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は信は

方すし入るやうにわつたにが都をわきて十ツの指とまん
るとい十ツの指とま〜に〜に〜は隆の〜と〜
と書

と書

果ホ美の風流で後世予うんと久ふ家上流流れて已ど
曲水ハ照るの住まうり千梅から〜ねとてあしどりけふま
曲水の匡中ふれち〜千那律師の息向の角上のふり
角上の男角〜け〜角〜の脚とて塔の地とて
わ〜て〜ん〜の〜

よまの一と深〜一廿の月

角〜

その水やさし流〜氷の音

全

海中其深〜う〜女也〜天教限りあ〜邪古の
浦〜亡名〜せふおもゆるのよ〜一〜其深〜後〜や
嵩亭の〜器〜女流の〜見〜く〜

一最ワタリ 思フ人住ルアタリヲ事ニヨソヘテ渡リアリクニ

○古来よりや月の名事りニ任ありうとて〜の〜

小笠原流秘記妙後之式三回

一輿流を伐〜の〜左の役人其一家の役〜右の役人の其家の
老翁し〜一〜交れ方もはあ〜は〜とて薬の向〜で〜
事大スハク小コ屋ウチ〜何ナニも役人素袍袴〜〜一〜

同上大成

一此殿 (コ) 居るに謡物ナラハ非居

○愚拙〜とい物ハ〜

此殿者

風信ふたづて一とあれびと余りやうふさるる人んは連ぶ
またて御曲と多よりの心の御徳はあはれいふと一思極むとて
せいついふと徳と御徳と一宗徳の文徳は御徳澤氏の時に
して用ひられと貞徳の徳川に御徳澤といれ御徳澤の
比御徳の徳と一温古知新の徳の徳といふ

一朝露^テ

活法五月夏菊ノ下ニ出シタリ此名アルモノ本草其外花史
艸史ニミエズ夏菊朝露艸ト出シタレハ夏菊ノ属ナルベシ或説
是テウロギナルベシトエリテウロギハ艸石蚕之其根ヲ賞シテ春ノ
モノ此説大キニ不合ス

○愚按朝露夏菊一切の花史ホニミエズ夏菊ノ属ナルベシト云ハての外

お送せり一名浪後花下學集に錢朝露艸と云り花史に云ら

諸ふ御て小く白青くうらり底に黒紅のさあひるさあハニツ出る
おあり玉瓜のをた御よりさサニ人年枝あり朝露をきて夕あそ
御園に正野山州いもやり

一海士^ア小船

初瀬トハ和哥ノヨミツケ之水辺山類之初瀬ハ山下則川ニテ
常ニ小船行カフ之故ニカクツケタル之又ハ船ノ泊リハハ元ト云意ニテ
泊瀬ノ字ヲモ用ユト云

○愚按是附會の伝之通俗志より泊瀬非山類水辺と云はれは
山類之初ニ与初瀬初る意之新故と云はれは後甚可く初瀬と云ハ
里の名ありて川山と云はれと結つておふはつて用捨ありて
初千載ハ二条の内大臣
おあそもやいこうと云りこれ初瀬の里れまの初る者

也無うせの望とるも又あまをのれり後集
 れあまの泊瀬とむう一夫の志願とむう一
 らやいさあしあはせりあまの志願とむう
 は悦よあまをの泊瀬とむう一夫の志願と
 二のりくお皆とるせの志願とむう一夫の
 の後とあまをの泊瀬とむう一夫の志願と
 椎本一瓜享保元年の流式通俗志とむう一
 水辺山取道は只名あまをの泊瀬とむう一
 船をれも古志破るる舟捨志とむう一
 名志とむう一舟の自身信用志とむう一
 志願とむう一舟の奇れよと合せとむう一
 て余の枕詞のあまをの泊瀬とむう一夫の
 通俗志とむう一

サ

一 櫻人 櫻花ニ執テ家路ヲ忘レル人又櫻ノ沢山ニ咲タル取ニ住居ヲ
 ニメタル人ヲモヨメリ又催馬樂ノ諷物ニ櫻人ト云アリ植物ニ非ス人倫
 ニモ非ス春季ハ持ス

○愚拙先師の後云風いおとるともまきとめては桂樹ののどけ
 又人倫ものなきあり 燈る葉白 櫻人子耐ちち修徳とむう一
 はくわつてゆりらんやッヨヤらんやッヨヤ
 深茶玉あまの二條祥園のほけさくく人の花人争りあまの
 藤ハくく人々とまきとむう一下果温故日深もあまの人の花の人
 とまき人倫とむう一

一 里ノ海士 阿波ノ國ノ名取

浦風ニナヒキニケリナ里ノ海士焼藻ノ煙心弱サニ

非皆糸乃下

安方銅片

○愚抄河原碓崎の一本松とて大本あり樹下に里の壺の古金満
 とて去るトも芝ありのうへは細く四圍ありけりふとも毎と
 のいけりけりありふ里の海まのいけりふ人家あり又後をね奉の
 所宇三月十八日小橋を人丸の所忌日所方の今後りせし
 為京の信実れ函時のぬもふより勅令して人丸の像と西く里
 の海まれ人丸とて梅と西くすゆきけりてふ人の秘りといふ所合の
 信地け里の壺小作りさる勅令に依て料地の地持けりさるる人
 夫入夫神ふ也夫とてさるる人まの松さくさくの壺人
 日浦風ふ花も自らぬ里の壺の果れ樹根ふさるる人
 注

一菊キノカサシツクニキ菅環カ文字ノ所ニ元日ヨリ五日迄ト記ス是年中行事
 公事根源等ニモ不載普ク書クヲ余議シ人ニ尋ルニ不知恐ラク
 書違ナラント思ヒタルニ源塩廿二菊ノカサシ元日ヨリ五日ニテ

此菊ハ絲ニテ作ルニ是禁中ノ儀トシテ然レハナキ事ニハアラス
 古代ヨリ有コト見エタリ公事根源等ノ書ニ不載ハ不審コソ

○愚抄正月踏奇ふりけり候カサリ冠タカコジの高中コふつふ給れ花成
 つらふりある是之系とては方りカのふありけりカ此菊カの
 綿ワタは元日より五日まで用也又踏奇にも用也二條殿元日の
 所爰白踏奇の時のけ名目又形々花の作りやふ兼載の秘伝
 あり師付されい畧之カ存是も別心兼之又三事根源とては
 ありカいささかカくカ康カ忽カれカ不カ審カ能カ事カのカ多カけカりカけカりカ
 三事根源ハ神園系良ニ二十一歳の時撰せしは奥書永
 二十九年正月十二日書カ偏カニカ察カのカ書カ之カ外カ見カ有カ神カ内カ大カ長カと
 あり又一本の奥書云右根源抄依柳言所西を後成園寺
 園白系良ニ于時生年十九とては柳言ハ豆村四代殿とて

大抵とてをせしむるものありてまわりのあり兼て
和漢の學識管見此母本と英嘆に所一生の著記を較るる
まは今天下の至寶と云ふ程原に去しくそより多ぶる
先著のわきまはさる程原に較るに千梅の著と信す

① 二字仮名 注畧

○門人同 各 至益の論に通俗志ふ能くしり出せり一風是成
用ゆるしは書ふわらうるに

一 木兔 猿蓑集冬々季ニミ、ツクノ登句アリ此モノ季ニ用テハ
ナニ猿蓑ハカリ之句ノ趣意ニトラへ取アツテ冬々季ニ成入ラレ
モノカ凡名宗匠ノ其座其句ニヨツテノ 柳キハ格ニナラス

○愚按猿蓑集尾の芥境が句冬々の部

木兔やみゆい切るる雪のはら

けりあての鞠よりを蕉門俳諧古今抄新例の式冬々の部
古抄ハ秋の部に入れば後り多しあるは是をよもあはれ
つぎの物語さしをを厭ふ故にや柳ハ二季の和歌といひ
兼て鳥の常用とを交して冬と定むるはト畧猿蓑集より
ミ、ツクの句冬々入りの蕉門の法といふはふいりの季
あはれいり又ハ名宗匠の序を自記する所の柳ハ格ふり
いん兼甲公の法及ハ神社先賢秘祖古人を在りすは也
とらへく源氏の友吟は推一風ハ通俗志とて秋とを是古抄の
通りより是れは彼温古知新より

② 一ニシテ 無言ノコトニ源氏ニ多ク出タル詞

○愚按横達とも書ぶ多程のよりの源氏末摘ふふのよと
いへども志多のちの成

貴友を君うまふ原のんあまのよのしめぬれよ
何れも子ゆして後れらぬれはむの童はむのうまて
そらあんのいさすうめてと後あつも是れはむの法每八講より
みろりししめりごと

一虎落^{モカリ} 何レノ書ニモ此二字之色ノ字モカリト草環ニ出セリ色ハ

一ガキ之モカリノ訓イフカシ

○愚按色^{ニキキ}の字訓ハセウとイハれりとの何のくもとのとあはれ
りぐりと訓もろくくは虎落とてのりとうませと
唐語より下學集曰虎落茂繁換厚とを足澤敵の

色^{ニリキ}の字は成とてろくくはむの

一旋人^セ 釋教人倫トス普ク僧家ニ尋ルニ此名アルモノナシ行堂人ノ
コトナルヘシトワ行堂ヲ旋行者トモ旋轉トモ云トス

○愚按旋人ト行堂人トマデハ能吟味セられり 予が大蔵に載之
旋人の志学の修の遊行にい出下ハ元亨釈書曰初予覃^{ヲヨニテ}總^{ソウ}角^{カク}用^{ヨウ}
而離家^{コソチ}逾^ユ志學^{シガク}而遊方^{ユウハウ}周旋^{シュゼン}相陽福鹿之門^{ソウヤウフクロクノカド}辛勤^{シンジン}而歸^キ
は和解^{ワゲ}予とハ鹿関自云ルニ總^{ソウ}角^{カク}ハ十五才^{ジュウゴ}にして學^{ガク}に志^シして
遊^ユりも周旋^{シュゼン}ハゆるりゆるりれ記玉原曰周旋^{シュゼン}中規^{チュウキ}折旋^{セツゼン}中規^{チュウキ}
まゝ相陽福鹿之門ハ相州巨福山建長寺瑞鹿圓覺寺此門下
ゆるり周流回旋^{シュリウクワン}辛苦^{シンク}勤勞^{キンロウ}して洛^{ラク}をゆるり來り歸りゆるり
鹿関紀年録^{ロク}ニありとス

スゴサス 春ニ至ツテ鷹ヲツカフニ鷹ノ鈴ノ鳴ヌヤウニ鈴ノ
ロエ子ヲサスニ是鷹匠ノ故實ニトス

○愚拙鷹の冷のちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
何のまゝさるるうさのうゝ温故り深日鈴籠指
鳴もておぼやうの鈴籠冷のまゝておぼやう人
おぼやうはまゝり冷のちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
様と細めてさるる冷のまゝて定家公の冷あつてさるる又
一書ふいのちつらの壁とまはるのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる

一菅原ヤ伏見 大和ノ國ノ名取之菅原ハ則菅家ノ御在所之其引
ツバキニ伏見ト云里アリ山城ノ伏見トハ別ニ

古今
イサ爰ニ我世ハナニ菅原ヤ伏見ノ里ノアレニクモヲシ

○愚拙是菅家のは秋に伊家の集り伏見の丘秋敷ありんばり
又けりて伏見の里とのひまはけりあ異人の暮あり伏見の暮あり
出而をけりあひり天皇の人とも云菅原もこれ行なりみ二年
外しておきり伏見に秋のちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
嵯羅門僧菩提とて追て菅原もこれ行なりみ二年
あう歡ひつ別著と執て板板小用の二丘東大さるるて後丁
とまはるのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
縁勢くくちて三人おぼやうのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
うは唾の怒りてさるるのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
振けて東と金とて東大寺れ言と撫つてさるるのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる
師めつて伏見の崗と名なりはねの居よりおぼやうのちねやうとあつてはねも冷の只とまはる

蘇中もい名を著るるに... 文亨新書本朝列仙傳に... 惠空賛曰伏翁何ヲ以三歳不起不言一旦起舞唱時哉之句乎
好哉聖境一場之倡和 下畧

一駒犬^神

書く説多ク或ハ神切皇后三韓退治ノコトニ附會シテ高麗犬
ナド、書又ハ天犬ナト、モ云リ皆非ナリトフコニ犬ハ戸前ノ犬ト云儀之
犬ハ能守リ防ク獸ナレハ非常ヲ防カシムル為ニ其形ヲ刻ミテ神社ノ
戸ノ前ニ立之依テ其名ヲ呼ビトク紫宸殿清涼殿ノ御帳ノ下ニモ有
又御良位ノ時兼明門ノ前ニモ立之^以紫銅ヲ鑄タル駒犬之^ヲ親見
之源氏榮花物語等儿帳ノ傍ニモ置之^ヲコト取クニ見エタリ皆戸前ノ
犬ノ意也

○愚按戸前の犬多りしを蓋ふ法書と非なりといふはされざる也

其は保と云ねぬ小狸おわりの却ておぼや久へる高麗犬ニ大
物犬駒犬の事と云りて智るるにあらぬ非事と除く遠は
王室今尚在銅犬而諸社階除置^ヲ獅子者非ト云^ト神社啓蒙
又白井宗因云上賀茂の狛犬の後板子日一犬と云り是
余社子孫之足と後ノ犬と云子細神祕と云^ト又大内の銅犬ハ
元日の事今ほは位を^ト子車人ハ犬の後^トて犬の養^トて君成
ちりゆ^トり延喜式ある^トり神代火酢芥命^{ホノスツリ}の尊^{ミコト}神徳
い^トる^トり^ト逐^トふ^ト其^トの^ト尊^{ミコト}に^ト伏^ト事^ト足^トて^ト火^ト酢^ト芥^トの^ト苗^ト商^ト法^ト
の^ト車^ト人^ト著^ト今^トに^ト多^トり^トて^ト天皇^{スメミコト}宮^{カキ}墻^{モト}傍^{スハシ}不^{ホユル}離^{イノス}代^ニ吠^ニ狗^ニ而^ニ奉^ニ事^ニ者^ニ
也^トト云^ト日本^ニ紀^ニ古^ニ事^ニ紀^ニ曰^ク為^ス沙^ニ命^ニ之^ト昼^ト夜^ト守^ト護^ト人^ト而^ニ仕^ニ奉^ニト云^ト
又^ト事^ト式^ト文^ト曰^ク大^ニ嘗^ニ會^ニの^ト日^ト車^ト人^ト犬^トの^ト夢^トを^ト發^ト見^トト云^トけ^ト從^ト日本^ニ
紀^トより^ト出^ト代^トの^ト國^ト史^トより^ト出^ト尚^ト神^ト代^ト屋^ト臨^ト神^ト日^ト後^ト州^トあり^トり^ト
い^トは^ト保^トを^トめ^トる^ト法^トを^ト好^トむ^トる^トは^ト戸^ト前^トの^ト犬^トハ^トされ^トる^ト也

又字ハいつにきくも養部ハ一人ハ史記并の神孫ニ依り
考ふる早稲の社も唐の教皇人太明神ト云知る一又河内國丹北郡
神泉ト云ふ人皇廿二代雄略帝の神孫の末に殉死皇人の塚有
是君と云ふ此遺法社代りのもの可考也

一庚申待 神祇ニ出せり是更ニ神道ノ事ニアラス唐土ニテ仙道ヲ信ス
者ノ出シタルコトニシテ且テ實ナキ事ニ勿論其神ナシトス
故事要言等ノ書ニ委シテアリ可見然レトモ本朝ノ俗祭ニテ日待
月待ト同ラス依テ世俗ノ用ト行フニ俳諧ニモ神祇ニ出シタルハ其
分ニモスレ但打コシテ去ラハ可トス

○愚按是又ニ神道のよりありば勿論其神ありといへん庚申待
ニ神と云ふより上古よりのものと勿論其神跡亦然し是神國に生

れてちも俳諧師より我々の俳諧ハつづくやと云ふや又さる武
霊社と云祖ト一中真の祖師貞徳君の戴恩記ホよりてよりハ
舊事紀古事紀日本紀ホ和國ニ都の神妙経及國史ホレトスレバ
日の本はり明々せん何と云て此等ト云テ去ラハ可トスヤリハの故也
此等の事一はふた書ホレハ日本紀ト云レる在ありハクヤの
亡命ト云ふものハこれト故事要言又教義あり皆未考ト云ふ
月ハ一輕率の書ト信一月ハありト云ふも亦ハ未考ト云フ可
ト云ハ合雜體ト云フハ一則神ト云ハ後田氏の命之凡ハ此ト
考ふる庚申の月ト用ふる日陰草ト云余ハ秘書ホレハ公レハ
又保の庚申ト云ふ也

庚申の得る方々ト云ハ如ク延喜先立ツ魚ヤ先立ツ
足庚申ト云ハ神代卷ト云ハ下ノ白猿四女御女ニ神の同養ト云レハ
官名トハ日本紀神代卷ト云ハ上畧五名ト云ハ是猿申庚大神時天御女

復問曰汝將先我行乎抑我先汝行乎對曰吾先汝行ト
きト累右の字の字又細女と後女と云凡て神道ハハの教と用
ゆるり通例とい神ハ七ツの教と用ゆ故に鼻長七咫背長七尺餘ト
之尚神道の家の秘伝也

又撰孟天王寺庚申堂ハ神祿青面金剛童子人王甲二代文武天皇
大寶元年正月初て庚申日出現公にも祈りて奉り諸國幸神の
本地ハ貞六十年月庚申年正月に開帳常に拜するなり云々の
は送言として年々庚申の日宵庚申として西日の兼詣近國より集る
其神傳一山の秘伝され其常儀ハ不見不聞不語の三儀あり
又七色の神供も諸の人七色れ菓子と稱して各求禱るに後七色成
ひて子厚意と可きと師の白誓中の教と仰るに後と仰るに及
と別つらうらふに後の方と床を並べ一心して神像を拜する
此の實中屋屋中の實是別祓祓秘と云々又庚申待として

又あふふと信じて世の世にふ多ひとありて其日祓ひて女家僕と
バハハ足別福と云ふと一十梅と云ふと火ひて折ふらうと云ふ
後田友と法國の幸神といふと云々後道の道祖神の女と云ふと
長蛇と云ふと云々

庚申の日は神道に祓祓も云ふ故に信家佛家も云ふは云々
又唐道家の後人同様の信ありて思ふにわは信師も云ふは云々
既拾芥抄曰庚申夜ノ誦 今案スルニ毎ニ庚申ニ禱ルニ向ツテ其名ヲ呼ハ
ニア由 永ク去ツテ萬福来ル
誦文ニ曰 彭侯子 彭常子 命兒子 季入幽冥之中 去離我身ト云
いにて禱して毎年のア子去まつて福を得ると云ふは云々の
云々云々の云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
又庚申の日は神祿と云ふ云々云々云々云々云々云々云々云々云々

一 アダシ野 非石野 イツクニモア茶毗取ヲサシテ之化野露鳥辺山

詩部終切齒

ノ煙トツケタル鳥部山ハ洛東ノ名取ニテ茶毗取クアタシ野ハ無帝取
ヲサシテアダシ野ト云義ク

○愚按尾捕抄ハ名取ノ取セシムルハ重中抄ハ名取ニテ名取
トテ對スノ團ヲ入レリトモ未ダ知ラズリ徒然ノコト也中ノ名取
ヨリ對シテ多難ノ名取ニテ此ノ名取ニテハ名取ノ名取ノ
アコトモリ人下畧對抄ニテハ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
古人ノ種ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
山城座座ノ奥ニテ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
ト云ク 依然大全

一^夜 紐

芋環夜分ノ取ニ出セリ是心得違也女ノ下紐ノ論ト混ニテ書ク

タガヘナリト見エタリ紐非衣類非夜分ニ

○愚按法書ニテ分ツ一連哥應安式曰紐一衣取ニ五句夜分ク
下紐ノ名取ニテ分ク
無言抄曰夜取ニ夜分ノ下紐ノ名取ニテ分ク
御筆ハ無言抄ノ紐取ニテ分ク海ノ名取ニテ分ク
ヲ連テ分ク

芋環曰紐之夜ノ夜分ノ帯ノ名取ノ下紐ノ名取ノ名取ノ名取ノ
紐ノ紐ノ海ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
通俗名曰紐一名ノ紐一衣取ニ器賊ニ花ニ名取ノ名取ノ紐ハ
非衣取又下紐取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ名取ノ
是レ同シクハ通俗名ノ紐をヨリ諸記トモ新式ニテ分クテ分ク
ハ法ノ名取ノ通俗名ノ御筆ノ後ニテ分クハ芋環ハ夜ノ名取ノ

版部終切齒

されども雲の霞りも又千梅をさへみたりされどもあはれふあはれふ是
程なりと云れぬ御筆の記も可と又と云ふはこれに夜の霞りとも
僧祇律曰紐ハ三衣ノ上ニカルトアリ 蝶集要曰前面ヲ鉤トス背上ヲ
紐ト名トス又佛食ラシノ時三衣風ニ吹落サルノ時遂ニ許シテ鉤
紐ヲ安ストス其 余五分律にも見たり凡經論釋と云ふも亦釈
曰ふありされ其意も通只紐の事と住するものこと云より紐ハ書經ハ
〇と云ふ所の書くはたのよ入るも勿傳も只好く其根をよふて
せし先賢と云ふしひるふらぬの事と云ふ也

〇住吉ノ神 非水邊ト云

〇愚按通俗志曰住吉ノ神水邊ニ神垣も水邊ニ名取之宮松里
社ホハ非水邊ト云其神も水邊ト云神代ノ巻より

當社ハ和哥ニ神祕極ノ御神依々御神依多一中小

元より我ハ浮る船の上波風うらいのき船人

又ト部兼直の所云

西の海邊ト云れ志和後より取れ出ー住吉の神

又和里ホハ下の名も取て水邊ト云うる事にて初と一古今集小

我りても久しきもの住吉此等の地松葉代經の也

此方にもよきと云道承くさるる人事と神と極よ
多梅の撰集わくを瑞中少初れ梅下と云ふ事
教々条は書作らる一離ささうんかんあまらうん
中終ふ事と和つる一をを御名利と云ふ事人信ふ
あはれ又多梅を証する如に同様の懸念あり

かゝつて石橋隣の竹下に堂を築きては修業の道に送る
 日の不れ和舟連遊を神の心しむる事ありは故に
 能れんありてい月としよの首首なるありし農工商の
 道と勅を一通俗志と能く人々大威小足と云ふ
 花と鳥と月の事小亮と好く先和慈曲を其りて
 拂ひてとて奉奉の世は風信と御の身事と云ふ
 業と人々事と云ふて破雲の事と保タシメり云

寶曆十二年春二月浪華市隱石橋又立判

あめ川ちみりけ初るく也ま歌をハ雲乃
 神詠り文字定まりふ力を至はくはまつら
 詠をたらし此も也古今和歌葉詠諸農
 一休よりけ入て道の志おもむ花咲おき那の
 昔不其法極まり如まより一も昔也一海は業
 びろこ事九條受り詠詠詠詠詠一ある下
 の事も一乃い事詠一ある人愛り可也不詳の事

宝曆十二年

三

たしあれおちる道小いしめんき海乃ま免
やのり草して門生ま送る家師おいらのな
一たを助まんおのくんをひま川小く
様木小急りく海のみをま送るのうらは玉の門葉
たちくもはくり草海くり人ふかりりく文み信
小くひりき侍りぬ

門人

源朝良義隆道

題系切齒後

余者河内一腐儒也。唯黃卷中與聖
賢對語。不屑俗士晤矣。幸有二三同
志者。而來論焉。所論弗過諸史百子
耳。方今

昇平既百數十年。文明大闡。名儒
碩學。接武而起矣。苟有志。則可一蹴
而至焉。當是時。魁予吾黨。和氣翁

流澤及衆。於是誹家者流有志于古者。春耕處士其人歟。處士為人。英偉聰敏。不敢與常流為伍。嘗師事菊谷三惟。惟本矩洲兩先生。而探和歌之秘。頤究連歌之壺奧。於是乎一時濟濟焉。載贄問奇者。輻湊於其門。自余與之一脩雞壇之盟。其知遇之厚。雖陳徐白元。亦安過焉。至

午春。處士書于余云。近有江東稱千梅者。為其徒。著排諧。篋纏輪。勉指擿。孛環之疵。疵。可謂遠於排道者也。然如蹲鴟。誤稱。苦彌。潔索。怪誕。不經。以欺人耳。蓋是不履先進之故。輟之所致也。余懼海畔有逐臭之夫。因報其說。墮于魔境。故欲奮然。發志。磨勵。鈍弱。指斥其書之舛錯。以諭之。同志。

如遂卒業。則必過子而諮焉。余自
領手教。極知其言不違。無日不下榻
設具。引領北望而俟也。一日當山月曉
仍在。林風清不絕。處士戴笠曳杖過
我橋菴。乃相迎留歡。果出向所謂著
書。徘徊系切齒二卷以示余。受而讀之。
其書雖不敢齒。祖馬之門。然至駁正雅
訓考證精覈。則不讓操觚之客矣。

惟恨余實聞不知其道。然於義則有
不可誣者。於是愈益知其識見不在
千梅之下也。於戲。所謂不待文王而興
者。夫於排道獨有此人。我固消翫之士。
而有此志也。六文德之化也。頃其黨相謀
速授之梓人。是亦可謂一盛舉也。予
余愛其黨不朽雅意。故以其所與
知題其後。且叙知遇之厚。併傳之世。

寶曆壬午夏六月

魯城居士北山彰樵書於

橘菴塾中



北序

三

